立山町文化財調査報告書　第17冊

古屋敷Ⅲ遺跡

――発掘調査報告――

1993年

立山町教育委員会

序

文化財は、祖先の営みを私達に伝えてくれる語り部であり、過去だけではなく現在の文化を理解するためにも重要なものです。中でも、埋蔵文化財はその土地に深く関係しており、郷土をよりよく知るための鍵であると言えましょう。

このたび調査の行われた古屋敷Ⅲ遺跡は、古屋敷段丘上に散在する遺跡群の一つであり、過去に縄文時代中期の住居跡が検出された古屋敷Ⅰ遺跡などとともに、まとまった地域社会を形成していたと考えられている遺跡です。

今回の調査では、これまで出土例の少なかった縄文時代中期前葉の土器がまとまって出土し、縄文時代における段丘面の時期別・用途別の使い分けなどを考える上での貴重な資料を得ることができました。 この報告書がより多くの方々に活用され、地域の歴史と文化の理解に役立てば幸いです。

最後に、調査に際して御援助いただいた富山県埋蔵文化財センターをはじめ、調査に御協力いただいた富山県立山博物館と地元や諸方の皆様に衷心より感謝申し上げます。

1993年３月

立山町教育委員会

教育長　金 川　正 盛

例　　言

1．本書は、富山県立山博物館の野外施設建設に先立つ、富山県中新川郡立山町古屋敷Ⅲ遺跡の発掘調査報告である。

2．調査は、富山県立山博物館の委託を受け、立山町教育委員会が実施した。

3．現地調査及び報告書作成は平成４年５月８日～平成５年３月19日の期間に行った。発掘面積は約1,100㎡である。

4．調査事務局は立山町教育委員会におき、社会教育課係長佐伯外宣・同主事三鍋秀典が事務を担当、社会教育課長開上寛が総括した。

5．調査担当者は、立山町教育委員会社会教育課主事三鍋秀典と立山町教育委員会臨時調査員瀬戸智子である。

6．調査にあたり、富山県教育委員会文化課・富山県埋蔵文化財センターから有益な御教示を得た。また、調査から報告書作成に至るまで、下記の方々から御協力を得た。記して謝意を表します。

　山本正敏・酒井重洋・久々忠義（以上富山県埋蔵文化財センター）、上市町教育委員会主任高慶孝、地元芦峅寺地区

7．遺物の注記は「ＴＦＹⅢ」とし、次にグリッド名、層位、日付の順に付した。

8．遺物整理・実測・製図は、三鍋・瀬戸が中心となり、高橋浩二（富山大学大学院生）、鈴木和子・榊原滋高・中村大介・松山温代（以上富山大学学生）が協力した。

9．本書の編集・執筆は、石器に関しては瀬戸が、他の部分は三鍋が担当した。執筆分担は各文末に記した。

目　　次

Ⅰ　遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 1
Ⅱ　調査に至る経緯 …… 2
Ⅲ　調査概要 …… 3
　1．立地と層序 …… 3
　2．遺　構 …… 4
　3．遺　物 …… 5
　　(1)　土　器 …… 5
　　(2)　土製品 …… 15
　　(3)　石　器 …… 15
Ⅳ　調査成果 …… 18
参考文献 …… 19
写真図版

挿　図　目　次

第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 1
第2図　地形と区割図 …… 2
第3図　調査区遺構全体図 (1) …… 折込み
第4図　調査区遺構全体図 (2) …… 3
第5図　遺物実測図 …… 6
第6図　遺物実測図 …… 7
第7図　遺物実測図 …… 8
第8図　遺物実測図 …… 9
第9図　遺物実測図 …… 10
第10図　遺物実測図 …… 11
第11図　遺物実測図 …… 12
第12図　遺物実測図 …… 13
第13図　遺物実測図 …… 14
第14図　遺物実測図 …… 15
第15図　遺物実測図 …… 16
第16図　遺物実測図 …… 17

Ⅰ　遺跡の位置と周辺の遺跡

立山町は富山県の東南部に位置し、立山連峰に源を発する常願寺川によって形成された、広大な扇状地上に拓けた町である。西は富山市、東は長野県大町市に接し、東西約43㎞、南北約21㎞、面積は308㎢である。

地勢は、三角洲や扇状地から河岸段丘・丘陵・溶岩台地さらには山岳高地にまでおよぶ多様な地形が、標高約10ｍから3,000ｍにかけて展開している。

今回調査した古屋敷Ⅲ遺跡は、芦峅寺集落の東方約500ｍ、常願寺川中流右岸の段丘上、標高約395ｍの地点に所在する。この段丘は、中位段丘と低位段丘の中間に形成されたとみられているもので、古屋敷段丘と通称している。

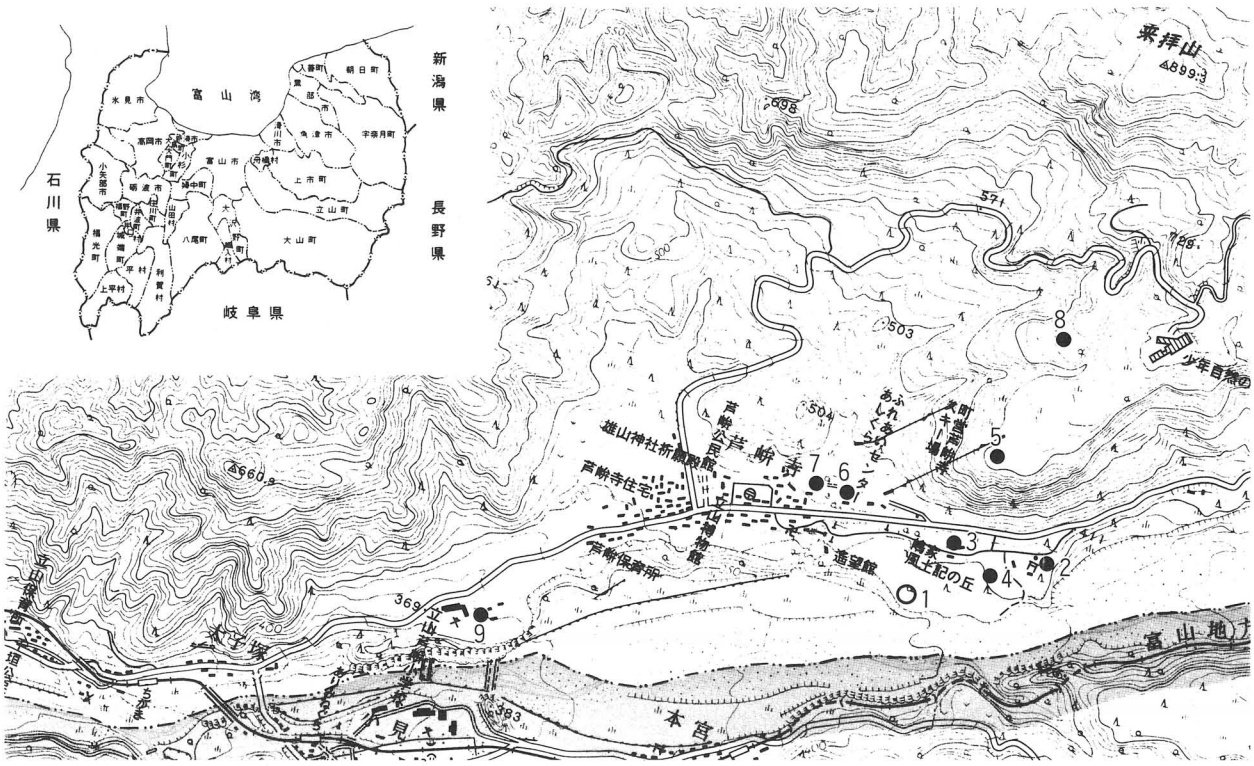
段丘面の縁辺部は段丘崖となっており、常願寺川の現在の河床との比高は約50ｍである。

北側には、不動平溶岩台地が迫り、その背後に来拝山が連なっている。常願寺川の上流方向にあたる東側には、弥陀ケ原溶岩台地が迫り、その遠方には立山連峰が望まれる。

周辺には、縄文時代から近世にまで至る多数の遺跡が存在するが、特に姥堂川東岸の段丘上から不動平溶岩台地上にかけては縄文時代遺跡が密集している。

これらの遺跡の中で古屋敷Ⅲ遺跡に関連があるものとしては、中位段丘上には野口（縄文時代前～中期）・不動平Ｂ地点（縄文時代中～後期）の各遺跡が、一段低い古屋敷段丘上には古屋敷Ⅰ（縄文時代中～後期）・古屋敷Ⅱ（縄文時代）・古屋敷Ⅳ（縄文時代）の各遺跡が、さらに不動平溶岩台地の先端部から西斜面にかけては不動平Ａ地点（縄文時代中～後期）がある。

（三鍋）



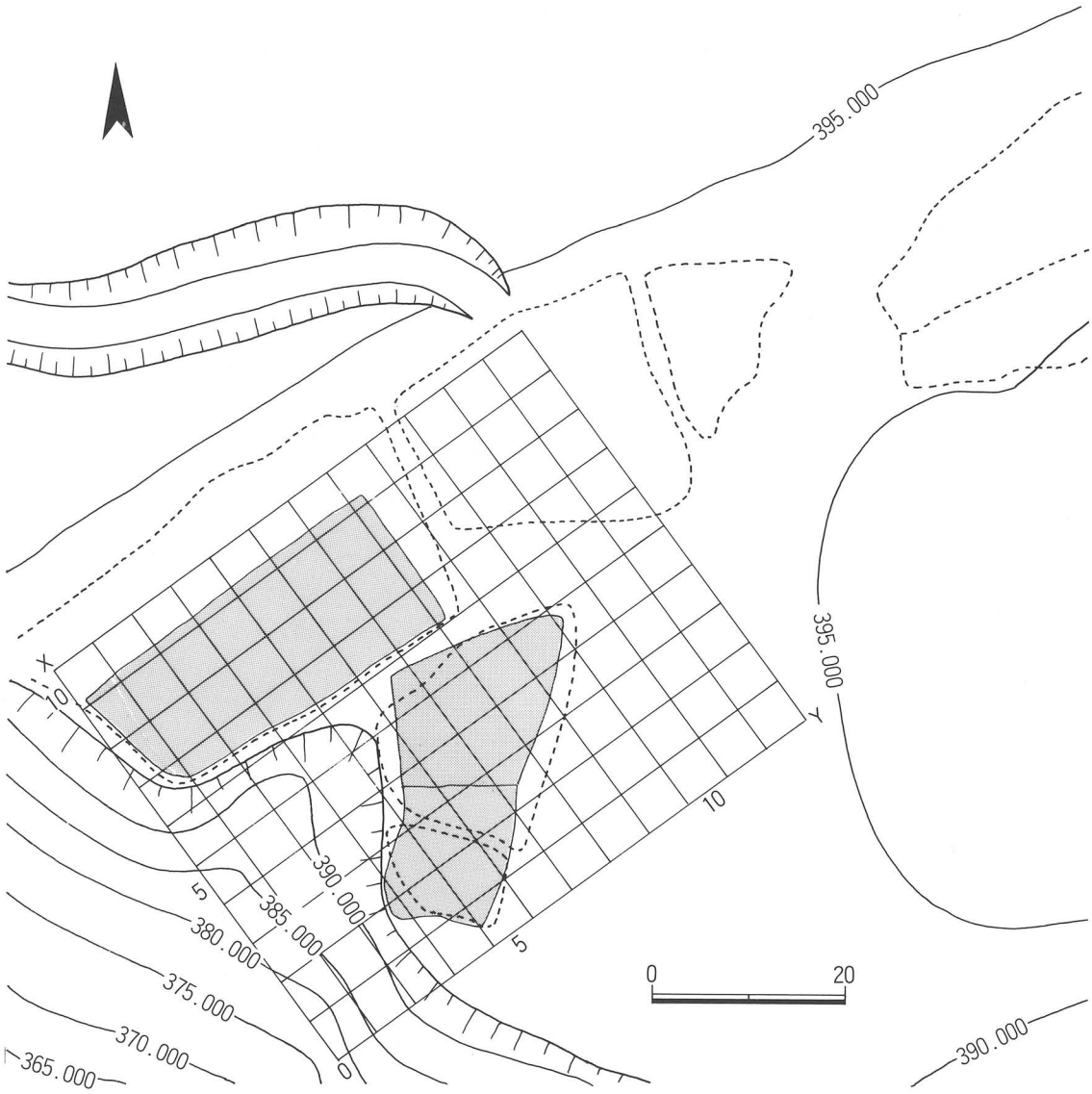
第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡（Ｓ＝1/50000）　1.古屋敷Ⅲ遺跡　2.古屋敷Ⅰ遺跡　3.古屋敷Ⅱ遺跡　4.古屋敷Ⅳ遺跡　5.不動平遺跡Ａ地点　6.不動平遺跡Ｂ地点　7.野口遺跡　8.芦峅寺城跡　9.門の本割遺跡

Ⅱ　調査に至る経緯

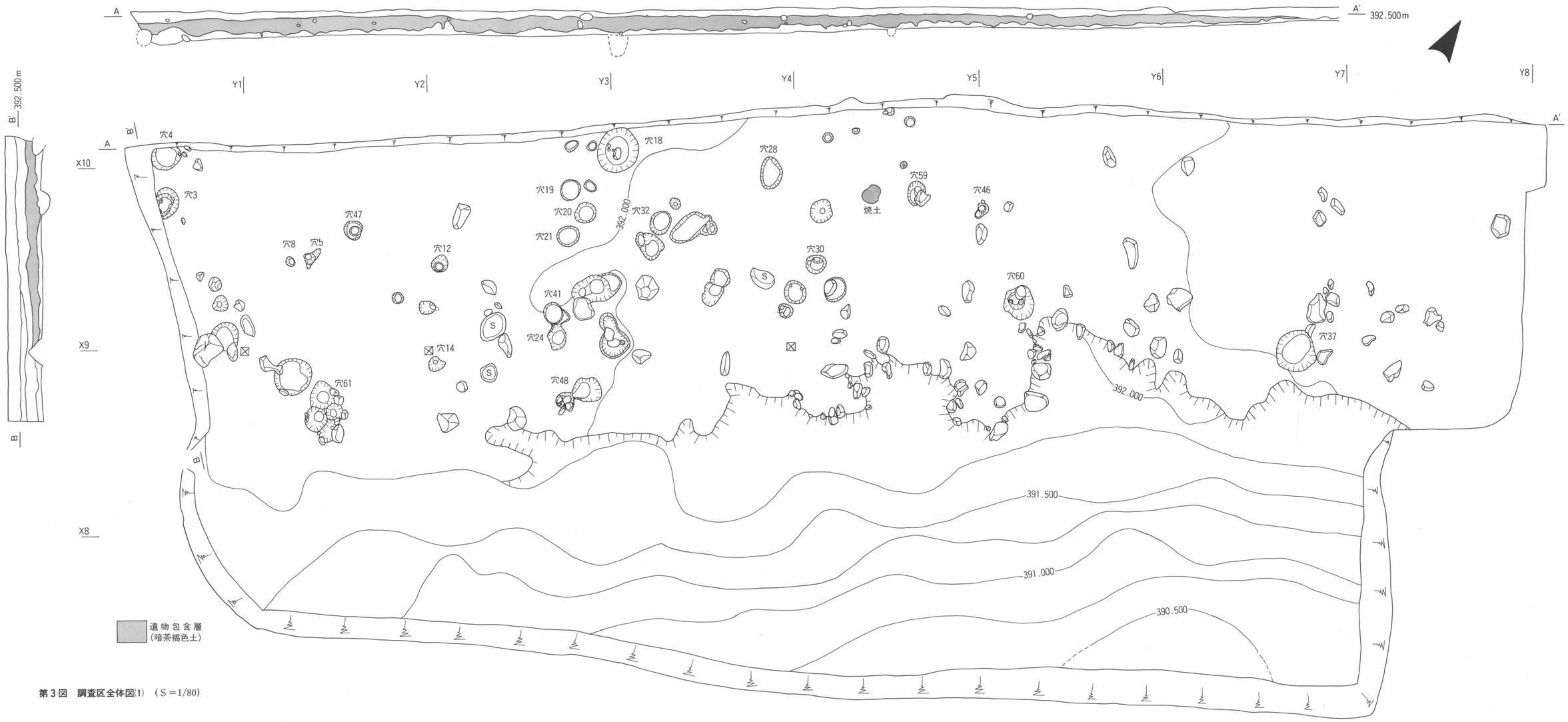
古屋敷Ⅲ遺跡が立地する河岸段丘は、かつてはトチ・ブナ等を主体とする落葉広葉樹林であったと考えられている。

明治以降、杉の植林と開墾が進められた結果、段丘上平坦部は水田と畑地が大部分を占め、段丘崖などの斜面は杉林となり、ごく一部に雑木林が原植生を残している。

平成２年、富山県立山博物館より富山県埋蔵文化財センターへ、野外施設の建設計画に伴う埋蔵文化財の取扱いについての照会があり、富山県埋蔵文化財センターではこれを受けて、立山町教育委員会の立ち会いのもと、５月７日～15日の間、古屋敷Ⅰ遺跡及び古屋敷Ⅲ遺跡の試掘調査を実施した。この調査結果を受けて、５月29日に富山県埋蔵文化財センターにおいて、立山博物館・富山県埋蔵文化財センター・立山町教育委員会の３者協議が行われ、平成４年度に古屋敷Ⅲ遺跡の発掘調査を実施することとなった。



第２図　地形と区割図

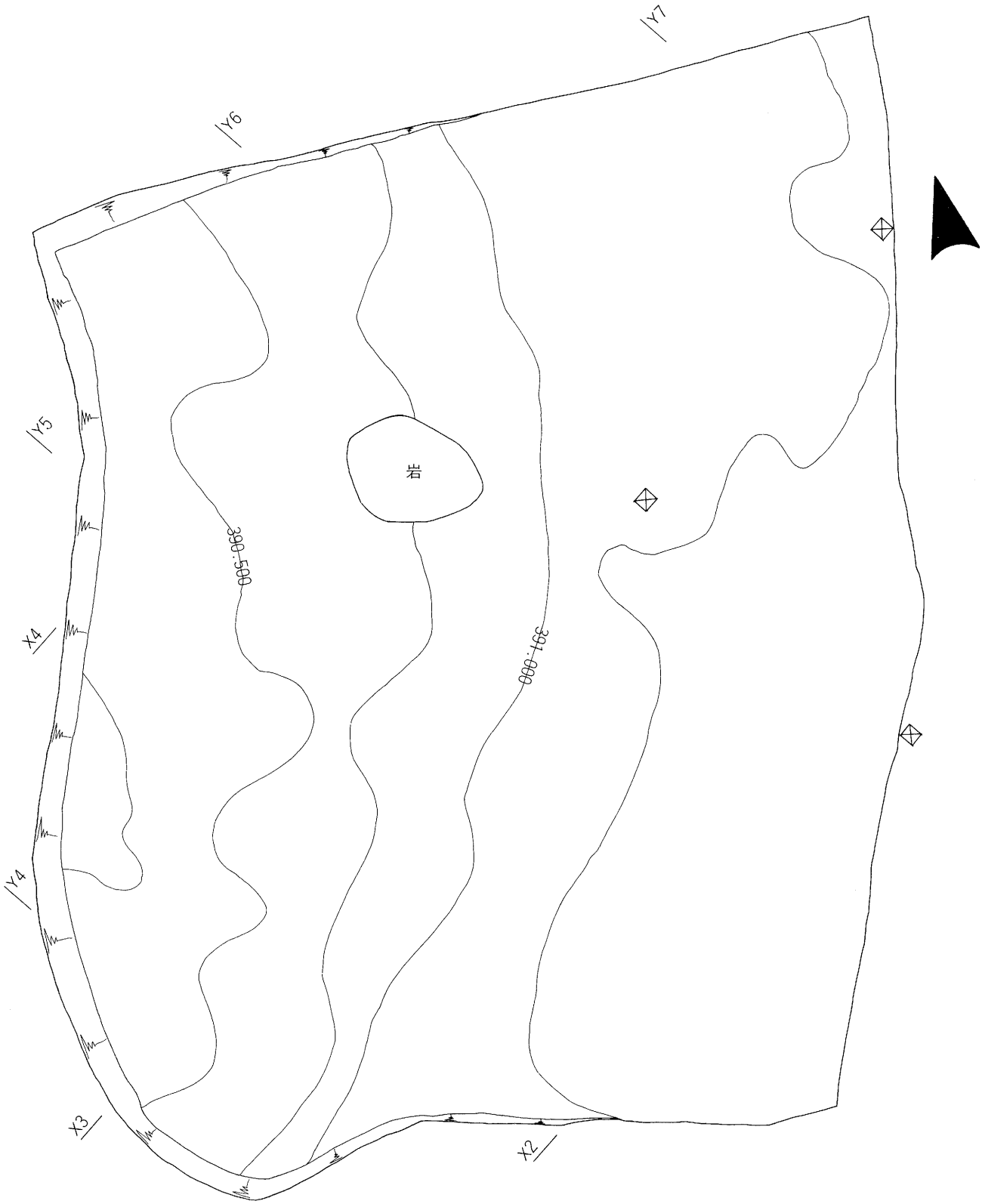


第3図　調査区全体図(1)　(S＝1/80)

Ⅲ　調査概要

1　立地と層序（第２～４図）

古屋敷Ⅲ遺跡は、芦峅寺集落の東約500ｍ、立山町芦峅寺字古屋敷に所在する。一帯は、常願寺川によって形成さ



第４図　調査区全体図(2)　（Ｓ＝1/80）

れた河岸段丘上にあたり、北側と東側には立山火山の噴火によって形成された溶岩台地が迫っている。

遺跡は、段丘が南側常願寺川方向に最も張り出した部分の南西端に、段丘崖に面して立地する。ここは、この段丘では最も低い部分にあたり、標高は約393ｍを測る。

調査対象地区には、北東から南西にかけてほぼ中央に、幅約10ｍの小支谷が入り込み、南北に２分されている。このため、調査は北側調査区と南側調査区に分けて実施した。

北側調査区（第２・３図）

小支谷北岸の東西に細長い平坦面で、遺構面は黄褐色粘質土である。層序は、第１層・耕作土、第２層・暗茶褐色土、第３層・黒褐色土、第４層・黄褐色粘質土（地山）となっており、第２～３層が遺物包含層である。調査区は全体に西側に緩く傾斜しており、遺物包含層も西側では厚く、東側ではごく薄く堆積している。なお、小支谷の岸は礫層となっている。

南側調査区（第２・４図）

小支谷南岸の南北に細長い区画で、調査前は平坦面に見えたが、地山面は西側にやや強く傾斜していることが調査で判明した。層序は、基本的に北側調査区と同様であるが、第２層から第３層にかけてが漸移的に変化している点と、地山面が礫面に黄褐色粘質土が入り混じった状態になっている点が異なる。遺物包含層が西側ほど厚く堆積していることも北側調査区と同様であるが、東側では遺物包含層がほとんど無いほど薄い。なお、傾斜地であるためか、こちらの調査区では遺構は検出されなかった。

２　遺構（第３図）

遺構は、全て北側調査区において検出した。

穴（第３図）　検出した穴は６１個であったが、それらのうち４分の１は開墾の際に岩を取り除いた痕であることが後日判明したため、最終的に４５個となった。

遺物の出土した穴は、わずか１個である。穴37は、Ｘ８・９Ｙ７に位置し、径約115㎝の円形で、深さ約13㎝の浅い皿状を呈する。覆土は黒褐色土の単層で、新崎式土器の口縁部が出土している。

炭化物の出土した穴は３個で、Ｘ９・10Ｙ３区に集中している。穴18は、上部が径約120㎝の円形、底面は長軸約90㎝・短軸約60㎝の楕円形で、深さは約65㎝を測る。断面形状はロウト状を呈する。覆土は黒褐色土の単層で、覆土内に拳大の割り石と炭化物が多量に混入している。穴19は径約55㎝、深さ約34㎝の円筒形、穴21は径約60㎝、深さ約40㎝の円筒形を呈する。双方とも炭化物が多量に混入している。

なお、穴20は、Ｘ９Ｙ３に位置し、径約55㎝、深さ約25㎝の円筒形を呈する穴で、炭化物は出土していないが、位置と形状の近似から、穴19・21と同じ性格を有するものと考える。

焼土の出土した穴は３個である。

穴28は、Ｘ９Ｙ４に位置し、長軸約90㎝・短軸約60㎝の不整楕円形で、深さ約12㎝の浅い皿状を呈する。

穴30は、Ｘ９Ｙ５に位置し、径約55㎝、深さ約30㎝の穴で、底面に小ピットを持つ。

穴46は、Ｘ９Ｙ６に位置し、長軸約45㎝・短軸約30㎝の不整楕円形で、南側に段を持ち、穴の内面にも火熱を受けた痕跡が見られる。

焼土（第３図）　良好な状態で検出し得た焼土は１箇所である。

焼土１は、Ｘ９Ｙ５に位置し、長軸約54㎝・短軸約44㎝の不整楕円形を呈する。状態は良好で、わりと長期間にわたり火を焚いた跡と考えられる。

なお、Ｘ９Ｙ１区にも焼土と思われる部分があったが、精査の過程で消滅した。ごく短期間火を焚いた跡であろう。

3　遺物（第５～１６図）

今回の調査では、ほとんどの遺物が遺物包含層から出土しており、遺構から良好な状態で検出し得たものはごく少ない。また、全体器形を復元できたものは、深鉢２・浅鉢１の３個体である。

(1) 土器

出土した土器は、近世の皿１点を除き、全て縄文時代に属するものである。

前期中葉（第６図１～３）　北白川下層Ⅱ式に比定できる一群である。

１は、ゆるく外湾する波状口縁部で、口唇に粘土紐を貼付した後、端部を交互に連続刺突する。文様は、縄文地に口縁と並行して薄い粘土紐を貼付し、その上に連続爪形文を施す。また、口縁内面にも幅１～２㎝の帯状に縄文を施文する。

２は、内湾する波状口縁部で、口唇外面に断面三角形状の粘土紐を貼付し、その上に２列の連続爪形文を施す。文様は連続爪形文のみで、２条１単位になるものと考える。また、１と同様に、口縁内面にも縄文を施文する。

３は、頸部で外反する器形で、頸部には連続爪形文を巡らし、胴部には縄文を施文する。

前期後葉（第６図４～７）　朝日下層式に比定できる一群である。

４は、直線的に開く波状口縁部で、隆帯で上下を区画した口縁部文様帯に、絡条体の押圧が施される。器形から円筒様式の流れを汲むものと思われる。

５は、頸部で内湾する器形で、口縁部には絡条体の押圧が、胴部には縄文が施される。

６は、半隆起線を密に引き（集合沈線文）、Ｖ状の区画（Ｖ状文）を施文する。

７は、胴上半部と思われ、結節縄文地に半隆起線のＶ状文を施文する。

中期前葉前半（第５図１、第７～10図）　新保式に比定できる一群である。今回の調査では、この新保式と次の新崎式の土器が、出土遺物の大半を占めている。

第７図１は、横位半隆起線の上辺には連続したＶ状刺突を、下辺には三角形の連続押圧を施し、あたかも鋸歯状印刻文のような効果を持たせているもので、あるいは前期に属するものであるかもしれない。

第５図１、第７図２～15は、縄文・撚糸文を地文とした口辺に、縦位に間隔をおいて平行半隆起線を引くもので、当形式の主体となる一群である。口縁端部に横位無文帯を持つもの（５・６）、口唇外面に連続爪形文を施すもの（７・９）などがある。

第８図１・２・４は、斜位格子目文を施文するものである。平口縁で口唇に連続刻みを施すもの(1)、小波状口縁で波頂部内面に円形刺突を施すもの(4)などがある。

第８図３は、平口縁で横位無文帯を持つものである。

第８図５～10は、口縁部に狭い文様帯をつくり、ヘラによる縦位短沈線を入れて横走する沈線で等分に断ち、所々に三角形印刻文と円形刺突文を施す文様（軌軸文）を施文するものである。隆帯を施文するもの（５・８・９）、突起を持つもの（８・９）、横位無文帯を持つもの（６～10）などがある。

第８図11は、逆位蓮華状文で施文するが、所々に円形刺突文を施しており、軌軸文の特徴を残している。

第９図１～５は、縄文・撚糸文を地文とした上に、半隆起線により曲直文を施文するものである。

第９図６～15は、木目状撚糸文を施文するものである。

第10図１～４は、撚糸文を施文するものである。

第10図５～10は、網目状撚糸文を施文するものである。

第10図11～13は、撚糸文を施す底部で、いずれも平底となる。

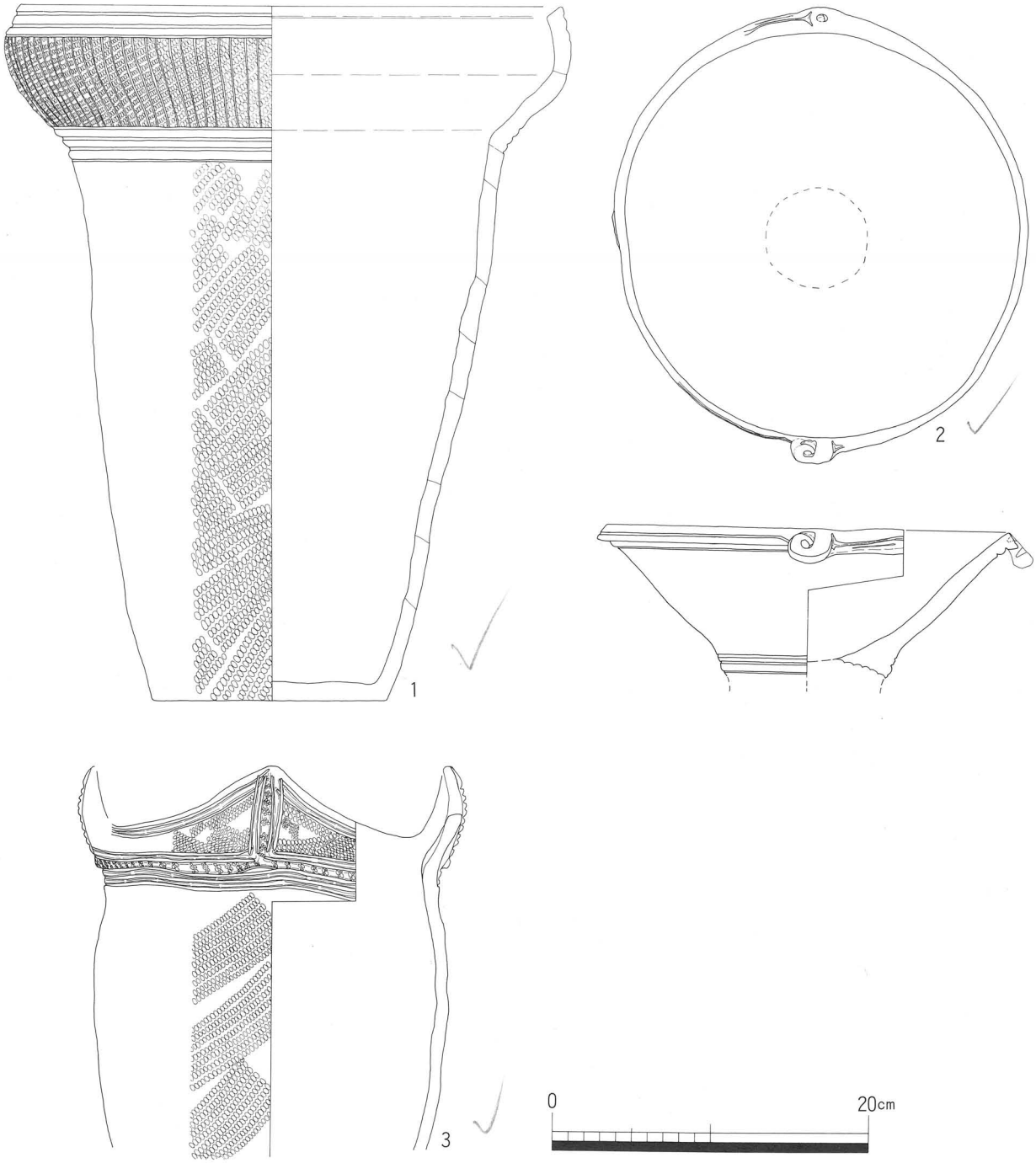
中期前葉後半（第５図２、第11～13図）新崎式に比定できる一群である。

第５図２は、直線的に開く器形で、台付鉢の可能性が高い。口唇にはＪ字状突起を付け、右側を三角に抉り玉抱三叉文風にする。内外面とも良く磨かれており、頸部には三条の沈線が巡る。中期中葉に属するものかもしれない。

第11図１～３は、蓮華状文を施文するものである。逆位のもの（１・２）と正位のもの(3)がある。

第11図４は、上部で直立する口縁部で、半隆起線で小連弧文を施文した中に縦位の半隆起線を配し、蓮華文のような効果を持たせている。

第11図５～７は、横位無文帯を持つものである。６には円形の突起が付される。



第５図　遺物実測図　包含層

第11図８は、横位縄文帯を持つもので、縄文帯内に半隆起線で菱形文を描く。

第11図９・10は、口唇外面に連続した縄文押圧を施すものである。

第11図11・12は、突起を持つ口縁部で、12は口縁外面にも隆帯貼付による楕円形突起を持つ。

第11図13は、波状口縁の波頂部で、斜位格子目文が施される。

第11図14・15は、口縁部の突起である。

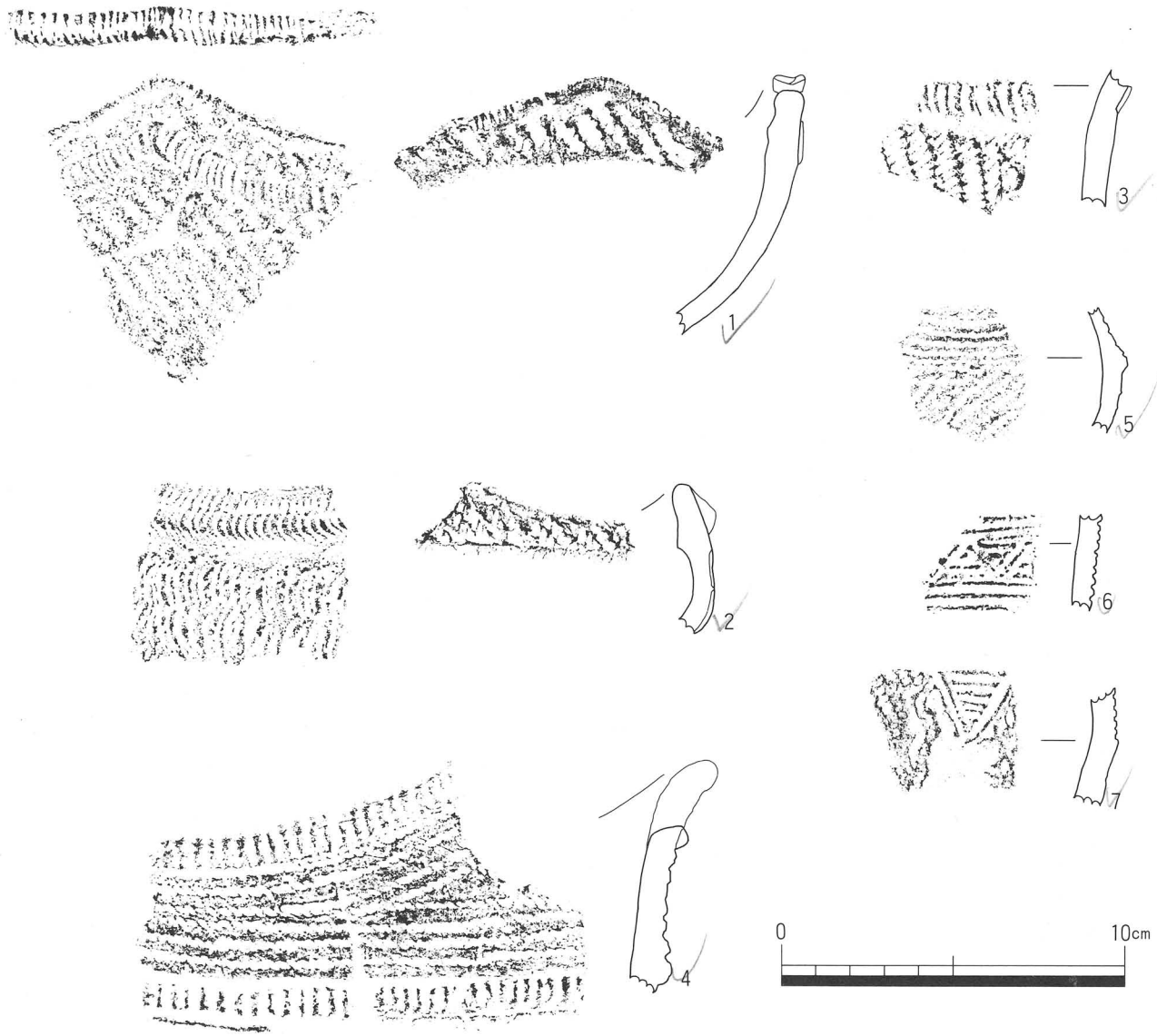
第12図・第13図１～８は、縄文・撚糸文を地文とした上に、半隆起線によりＢ字状文等を施文するものである。突起を付すもの（第12図１～３）、正位格子目文の施されるもの（第12図５・６）、無文帯の上下縁に楔形の刻目をつけるもの（第12図８）などがある。

第13図９～15は、半隆起線により施文する底部である。９は正位格子目文が施される。

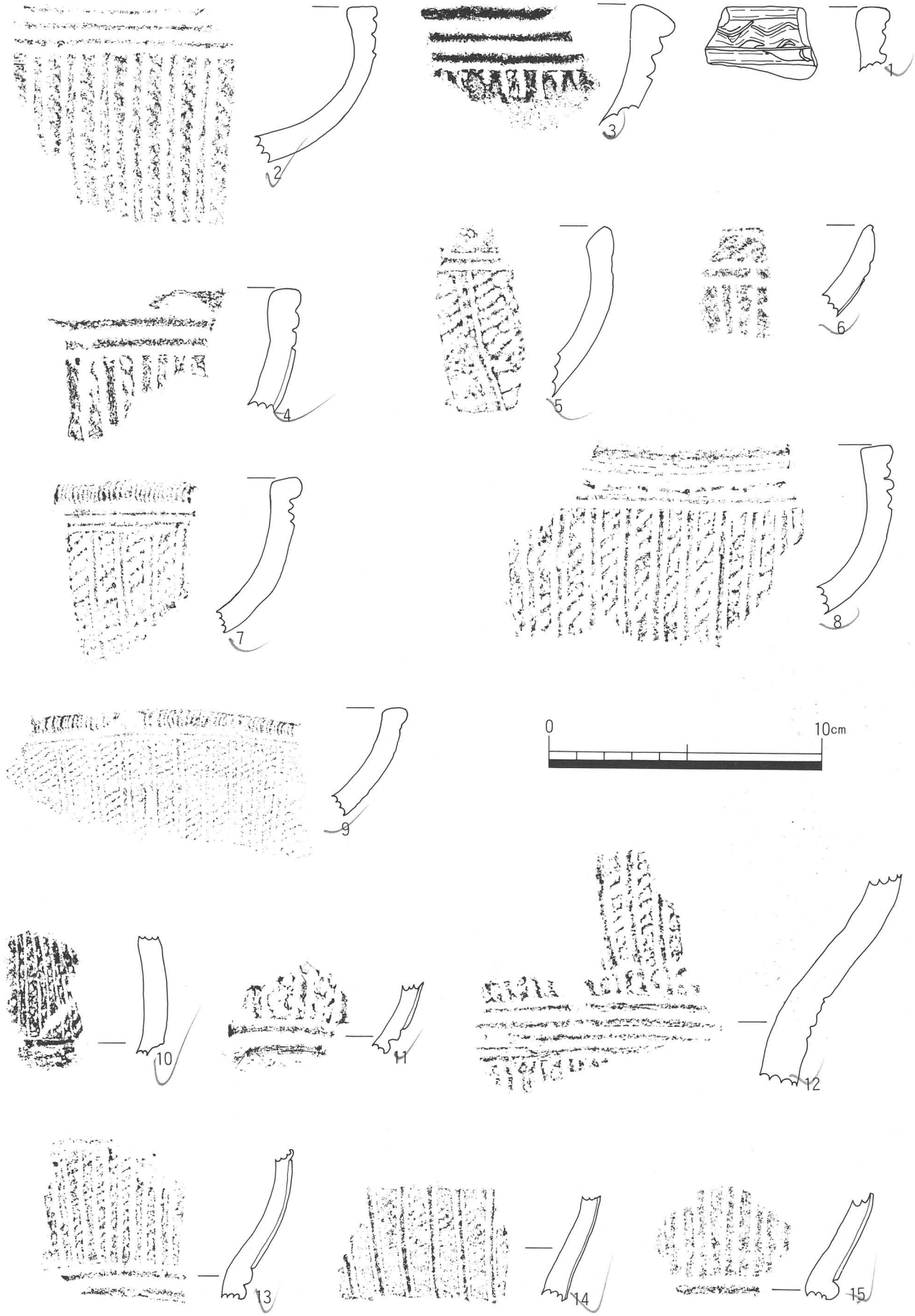
中期後葉（第５図３、第14図１～３）串田新式に比定できる一群である。

第５図３は、張り気味の胴部に山形波状口縁が付く器形で、口唇には半隆起線が施され、口縁部を区画する隆帯上には縄文が施される。

１～３共に、貝殻腹縁文で施文する。１は工字状文が施される。

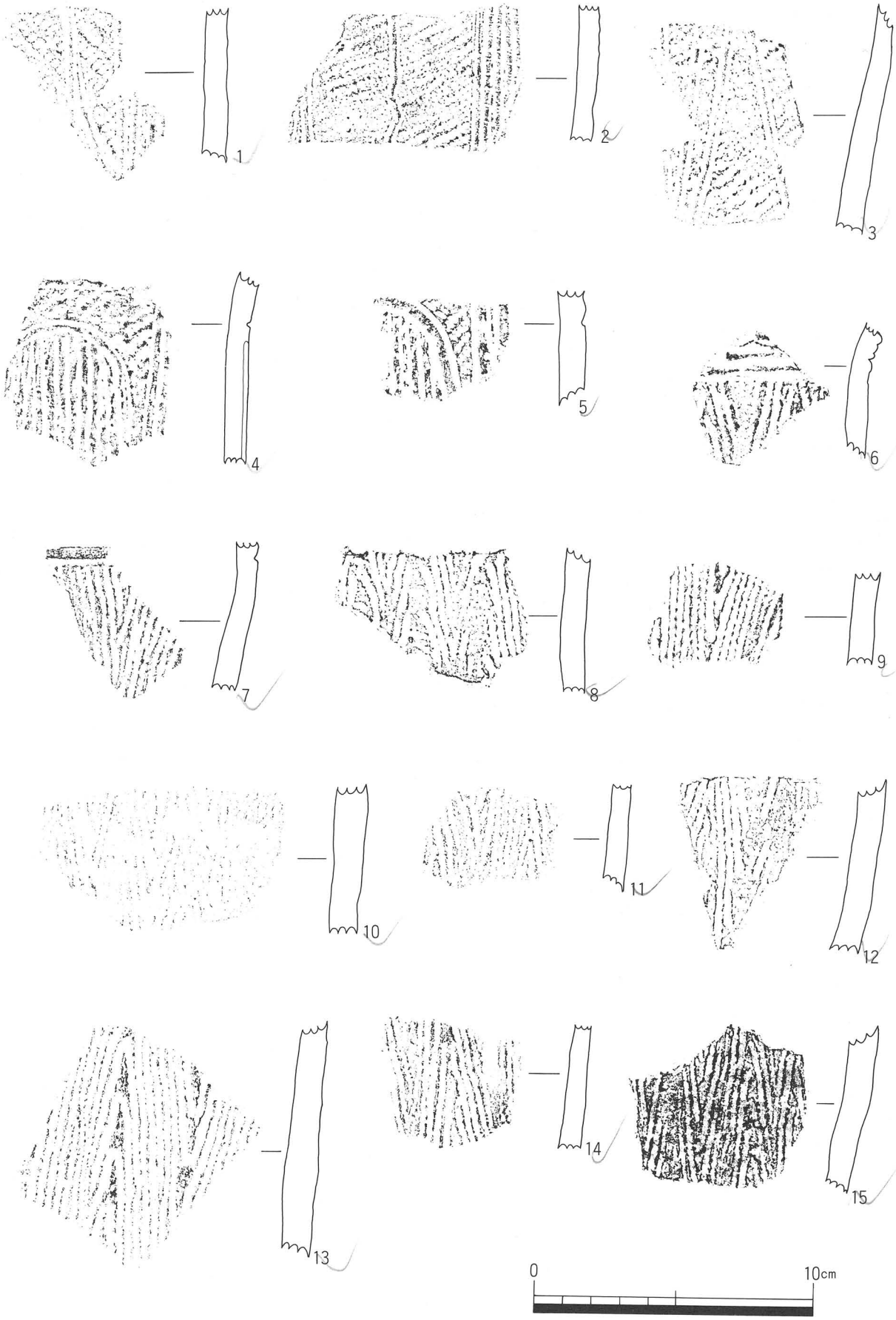


第６図　遺物実測図　包含層

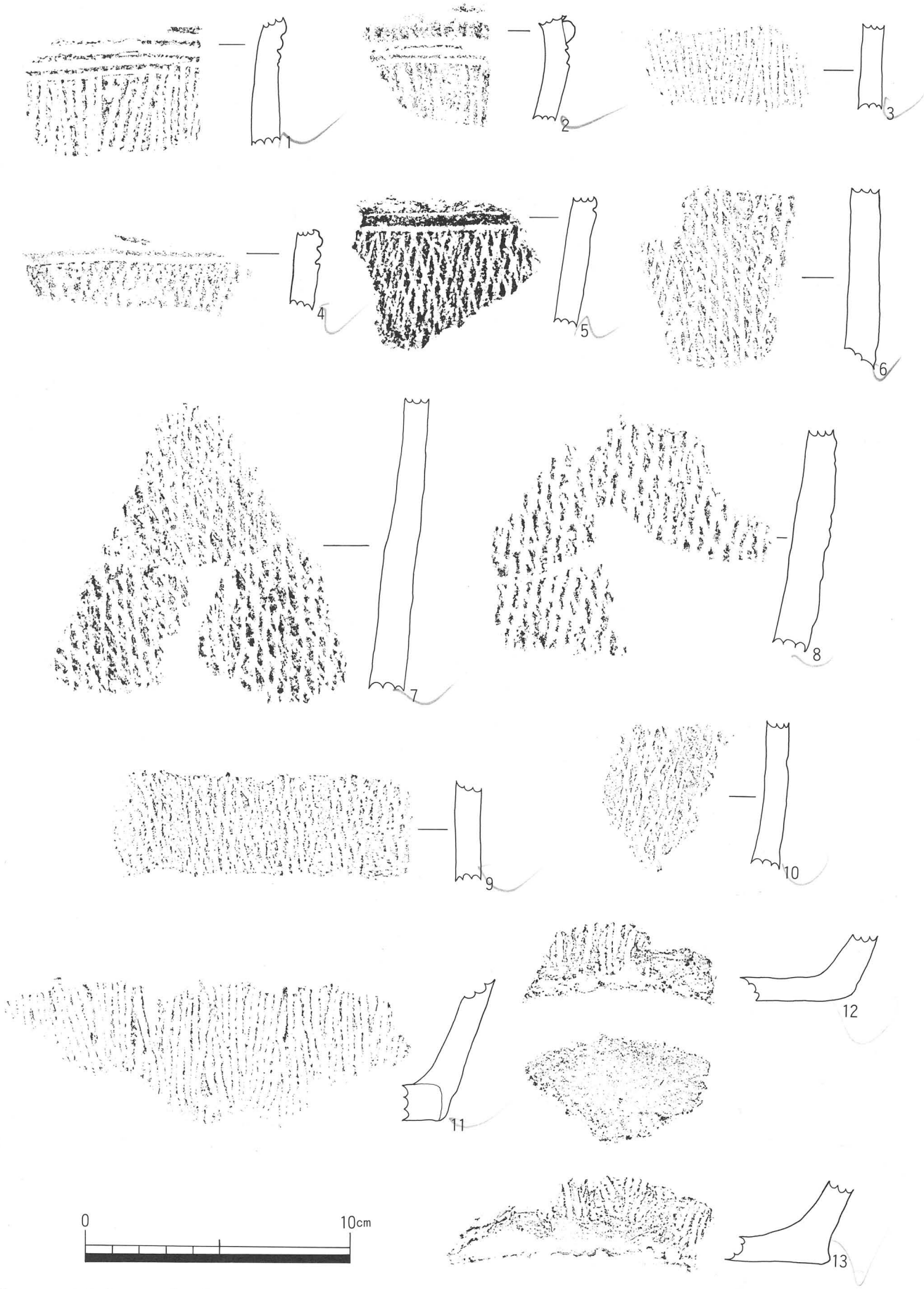


第７図　遺物実測図　包含層

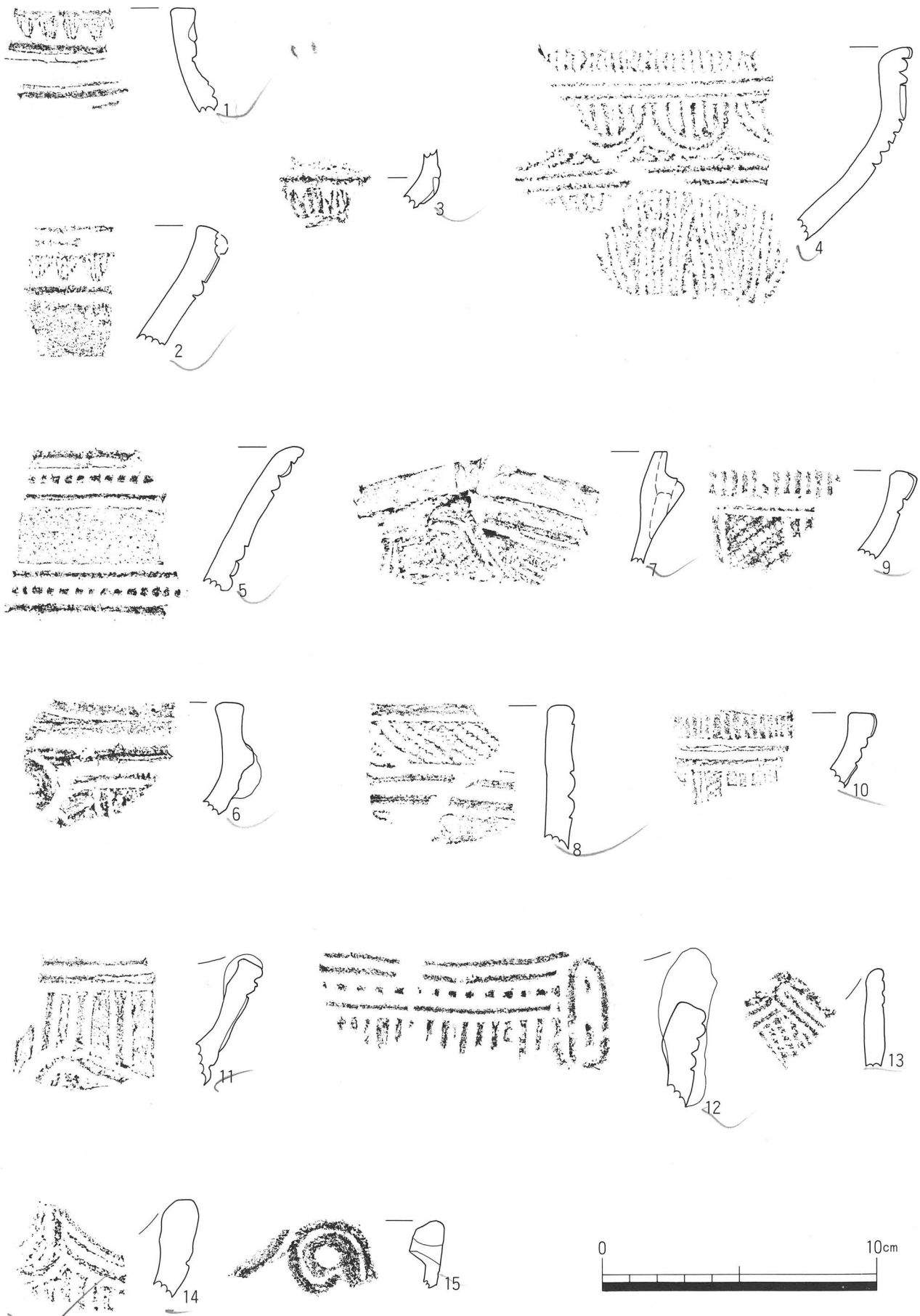
第8図　遺物実測図　包含層



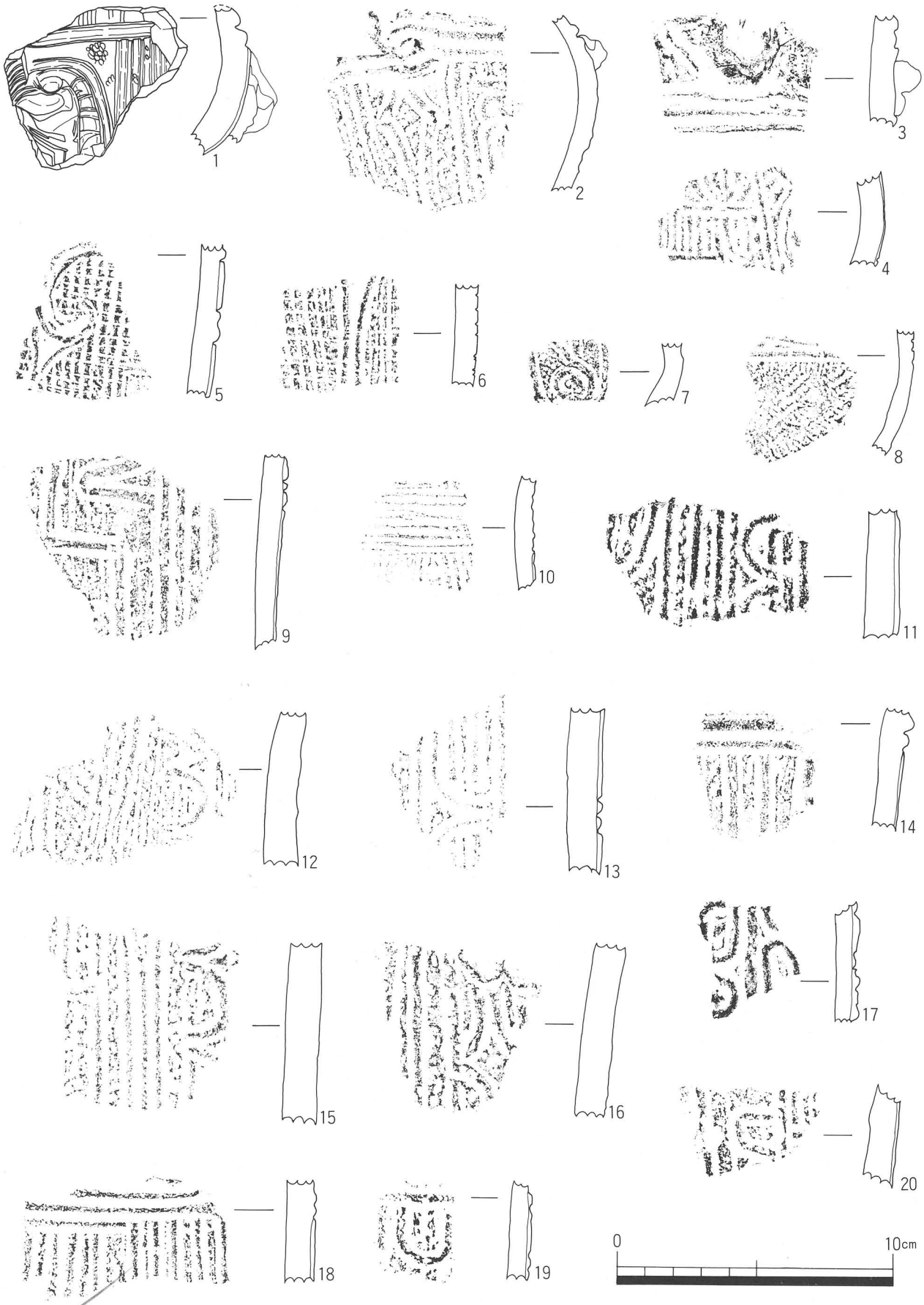
第9図　遺物実測図　10.表採　その他．包含層



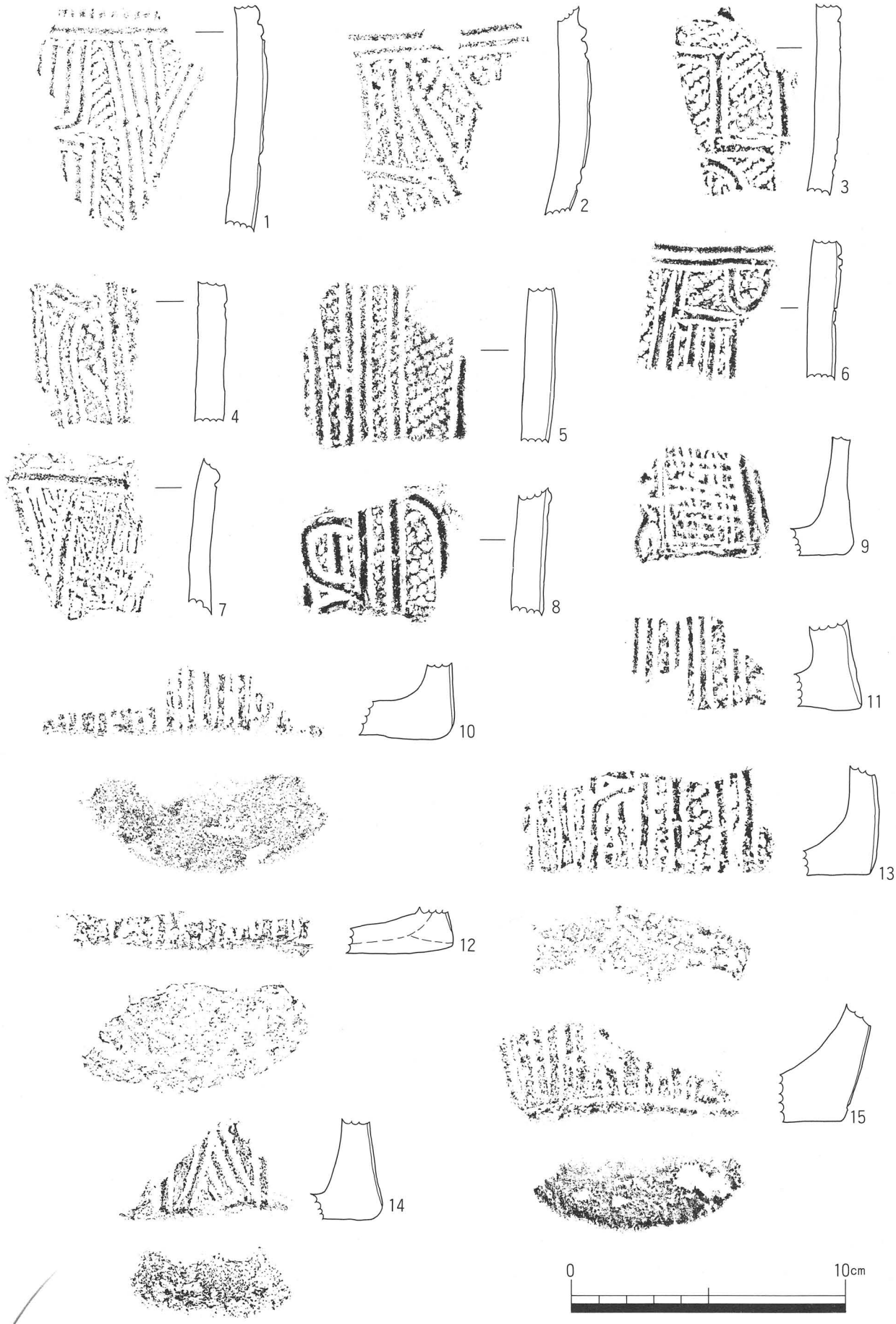
第10図　遺物実測図　包含層



第11図　遺物実測図　包含層



第12図　遺物実測図　1.穴37　その他，包含層



第13図　遺物実測図　包含層

後期前葉（第14図４・５）気屋式に比定できる一群である。

４・５共に、沈線間に連続刺突で施文するものである。５は、やや張った胴部に短く外反する口縁部がつく器形で、口縁端は小波状を呈する。文様は、胴上部に連弧文を配し、頸部にはつまみ出しの隆帯が巡り、口縁部は無文となる。

（三鍋）

(2) 土製品

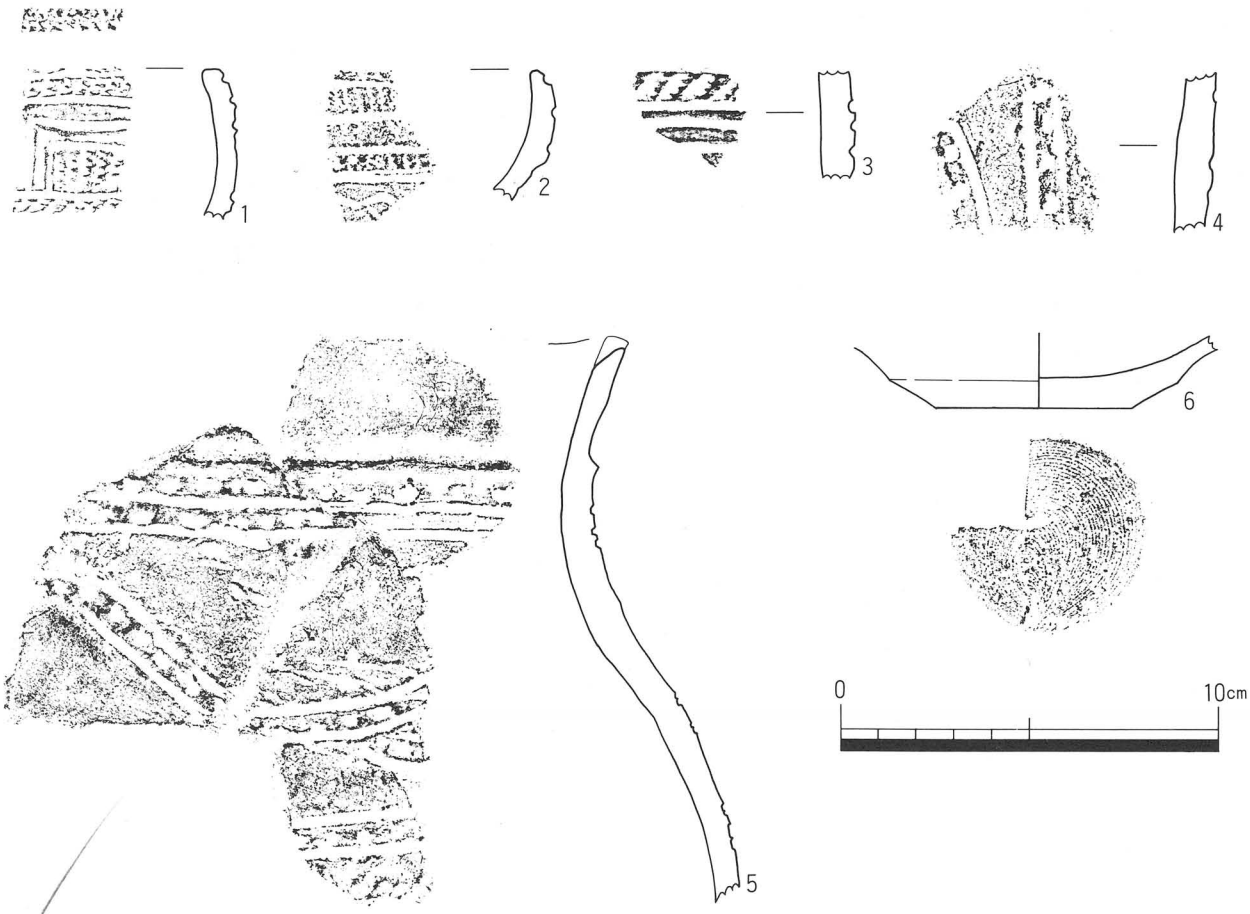
用途不明品（第15図７）　Ｘ４Ｙ４の遺物包含層から出土した。素焼の用途不明土製品である。表には５つの花弁を模した紋様を施し、裏面には、指先による押圧痕を残す。

(3) 石　器

石鏃（第15図１）　Ｘ９Ｙ６で表面採集された、完形の凹基無茎石鏃である。最大長20.3㎜、最大幅17.5㎜、重量は0.7㎎である。石質は鉄石英である。

剥片（第15図３～６）　全て遺物包含層（暗茶褐色土）からの出土である。重量は２が2.2㎎、３が３0.9㎎で、ともに鉄石英製である。４～６は黒曜石である。重量は４が0.4㎎、５、６が0.9㎎である。４は、二次加工と思われる痕跡が認められるため、石鏃の未製品である可能性も考えられる。

磨製石斧（第16図１、３）　完成品（第16図１）と、未成品（第16図３）がある。完成品は蛇紋岩製で、形態は定角式である。基部、刃部とも大きく欠損しているが、刃部が一部残存しており、使用痕がみられる。未成品は泥岩製である（第16図３）。最大長10.86㎝、最大幅5.09㎝の完形品である。背面は平滑でほぼ全面に研磨痕が認められるが、一部礫面が残されている。刃部の研磨にまで至っているが、細部の研磨や調整を中断して、打製石斧と同様に使用し



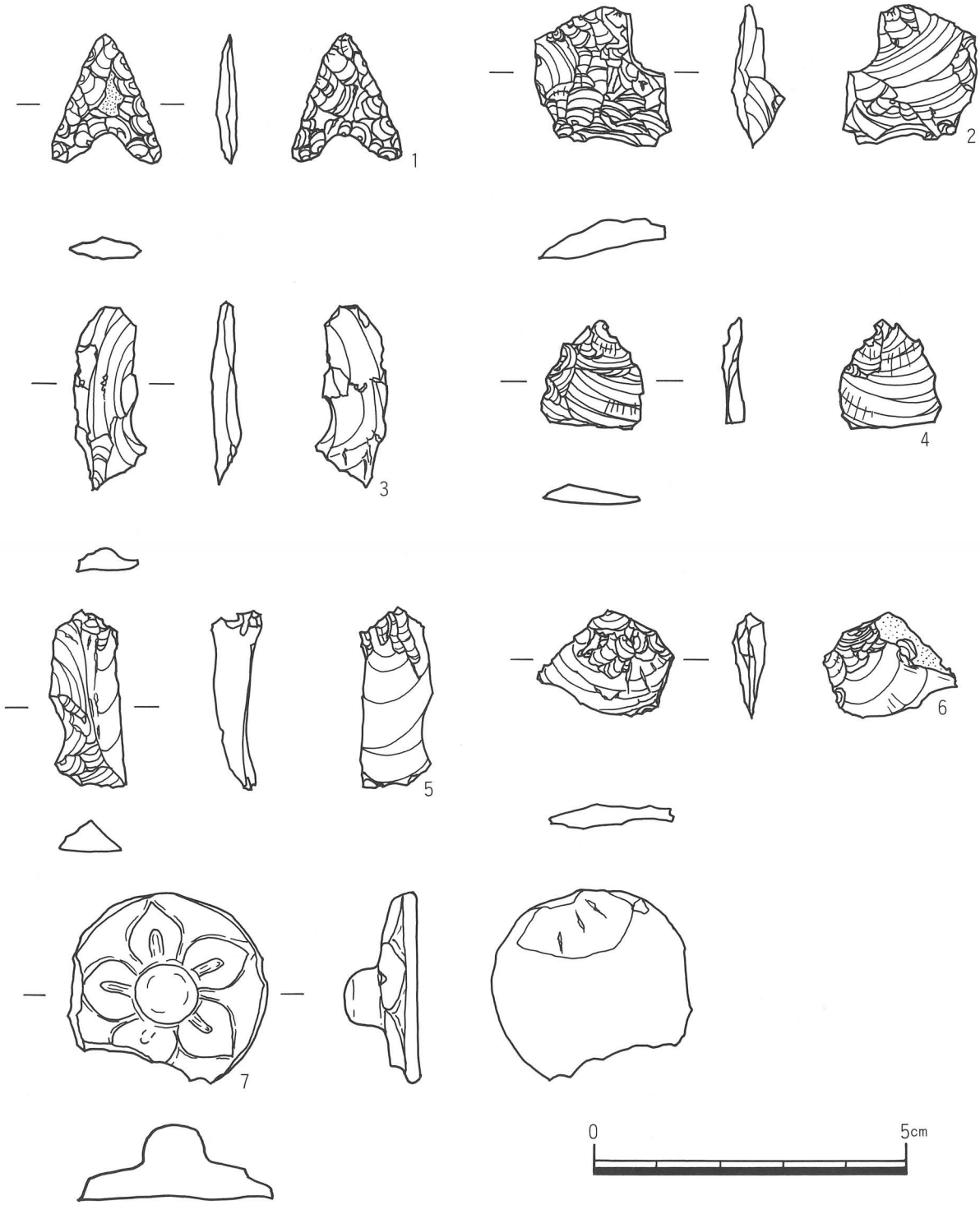
第14図　遺物実測図　包含層

た可能性がある。

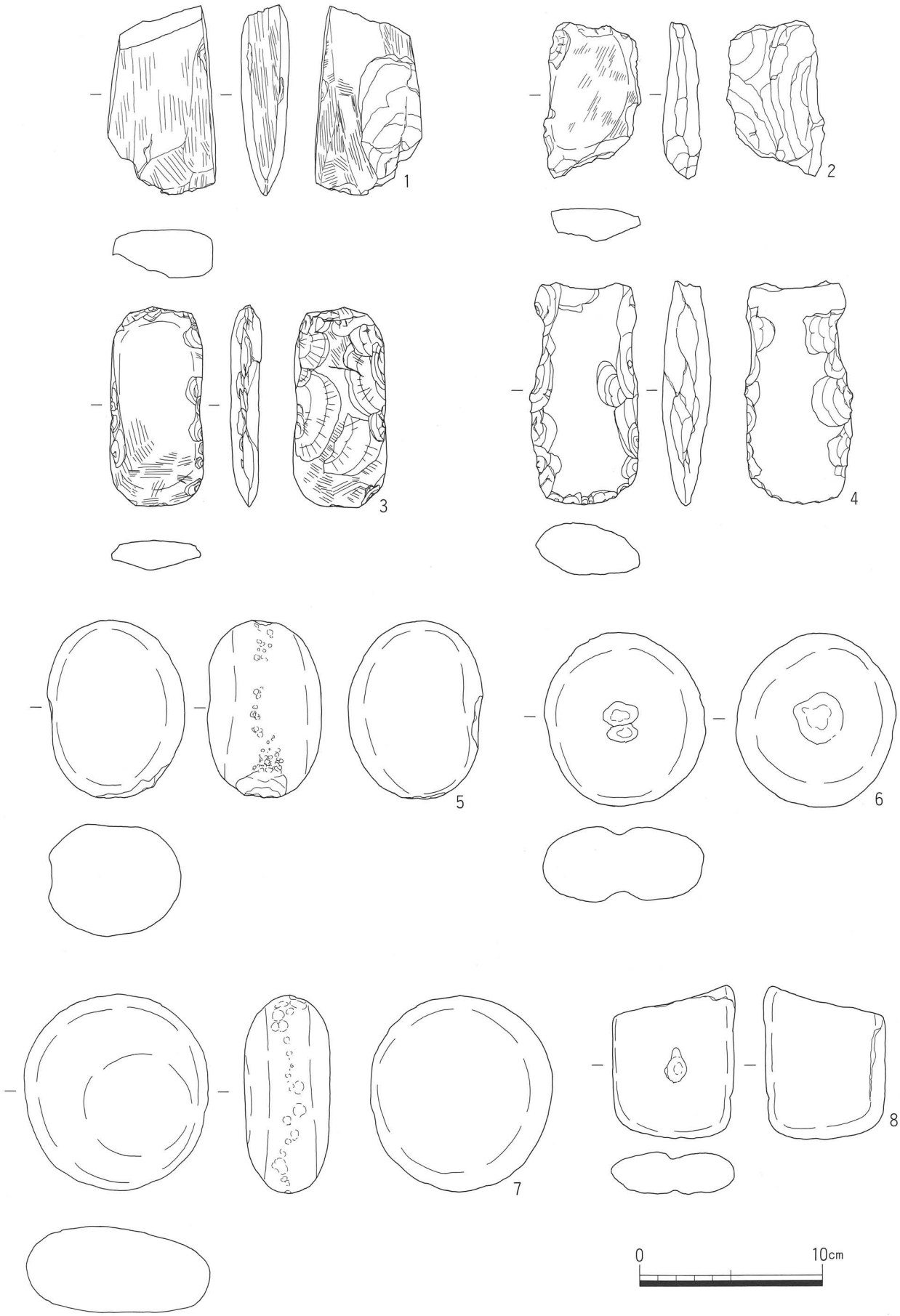
用途不明品（第16図２）　安山岩製である。表面が一部風化しており、裏面の剥離は比較的新しい。風化した表面に粗い研磨痕が認められるため、砥石の破片である可能性が考えられる。

打製石斧（第16図４）　短冊型の完形品である。石質は不明である。背面に礫面を残す大型の横長剥片を使用している。最大長12.1cm、最大幅5.97cmである。

叩石（第16図５、７）　両者とも定山岩製であり、円礫の側縁を利用している。重量は５が555mg、７が618mgである。



第15図　遺物実測図　1.表採　その他．包含層



第16図　遺物実測図　包含層

凹石（第16図６、８）　両者とも安山岩製である。重量は６が402mg、８が100mgである。６は両面、８は片面のほぼ中央に敲打痕が集中する。両者とも風化が激しく、特に８については、裏面の使用の痕跡が明瞭でなく、また、原形もとどめない状態である。（瀬戸）

Ⅳ　調査成果

前章までに述べた点と問題点を要約し、まとめとする。

1．古屋敷Ⅲ遺跡は、常願寺川によって形成された河岸段丘上に、古屋敷Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ遺跡とともに遺跡群を形成して存在する。

2．遺跡群の中で占める位置は南西端にあたり、ここは遺跡群を貫流する小支谷の最下流で、小支谷が常願寺川に流れ落ちる所である。この位置関係からみて、段丘上から常願寺川河床への降り口にあたると推定される。

3．遺跡の存続年代は縄文時代前期中葉から後期前葉に至り、遺物出土状況からみて中期前葉が最盛期である。

4．遺構は、穴45個、焼土２箇所である。

穴は、遺物の出土したものは１個にすぎないが、炭化物・焼土は複数の穴から出土している。その分布状態をみると、炭化物の出土した穴はＸ９・10Ｙ３区に、焼土の出土した穴はＸ９Ｙ４～６区に集中しており、使用目的による場所の使い分けが見てとれる。

焼土１は、Ｘ９Ｙ５区に位置し、周辺には焼土の出土した穴が集中する。この焼土は地床炉と考えられるが、炉掘り方やこれに伴う柱穴は検出されなかった。

5．遺物は、ほとんど全てが包含層からの出土である。

土器は、縄文時代前期中葉から後期前葉にかけてのものが出土しているが、量的には中期前葉のものが大半を占める。

土製品は、近世の立山信仰に関連するものと推定するが、用途等は不明である。

石器は、全て縄文時代に属するもので、全部で34点、特に製品は８点にすぎない。これは、集落遺跡と比較して特異な点であり、当遺跡の性格を考える上での鍵となるといえよう。

以上、遺跡の立地及び遺跡群の中における位置、遺構・遺物の在り方からみて、当遺跡は古屋敷遺跡群内における河川漁労のキャンプサイト的存在であったものと推定される。ただし、単なるキャンプサイトなのか食糧加工等の機能も持つ拠点的性格のものなのかは、遺跡群全体の在り方等から総合的に判断する必要があるため、現時点での判断は保留としたい。（三鍋、瀬戸）

参考文献

ア　**網谷克彦**　1982　「北白川下層式土器」『縄文化の研究３』雄山閣

ウ　**梅原末治**　1935　「京都北白川小倉町石器時代遺跡調査報告」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第１６冊

カ　**加藤三千雄**　1986　「新保式期」『真脇遺跡』能都町教育委員会、真脇遺跡発掘調査団

キ　**岸本雅敏・山本正敏**　1986　『都市計画街路七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘調査概要(4)　南太閤山Ⅰ遺跡』富山県教育委員会

コ　**小島俊彰**　1974　『富山県立山町吉峰遺跡第３次発掘調査概報』富山県教育委員会

　小島俊彰　1986　「朝日下層式期」『真脇遺跡』能都町教育委員会、真脇遺跡発掘調査団

サ　**酒井重洋・神保孝造・奥村吉信**　1981　「Ⅲ　吉峰遺跡」『富山県立山町埋蔵文化財緊急発掘調査概要　白岩薮ノ上遺跡　吉峰遺跡』立山町教育委員会

シ　**島田修一**　1985　「(3)出土遺物　Ａ土器」『長山遺跡発掘調査報告』八尾町教育委員会

ス　**鈴木道之助**　1981　『図録石器の基礎知識Ⅲ　縄文』柏書房

タ　**立山町教育委員会**　1989　『吉峰遺跡－第６次発掘調査概要－』

　立山町教育委員会　1990　『吉峰遺跡－第７次発掘調査概要－』

ニ　**西野秀和**　1983　「縄文時代の遺物」『鹿島町徳前Ｃ遺跡調査報告（Ⅳ）』石川県立埋蔵文化財センター

ハ　**橋本正**　1970　『立山町吉峰遺跡発掘調査報告書』富山県教育委員会

　橋本正　1972　「第Ⅱ部立山町吉峰遺跡・第Ⅴ部縄文時代前期の諸問題」『富山県埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』富山県教育委員会

　橋本正　1972　「三、縄文早・前期」『富山県史』考古編

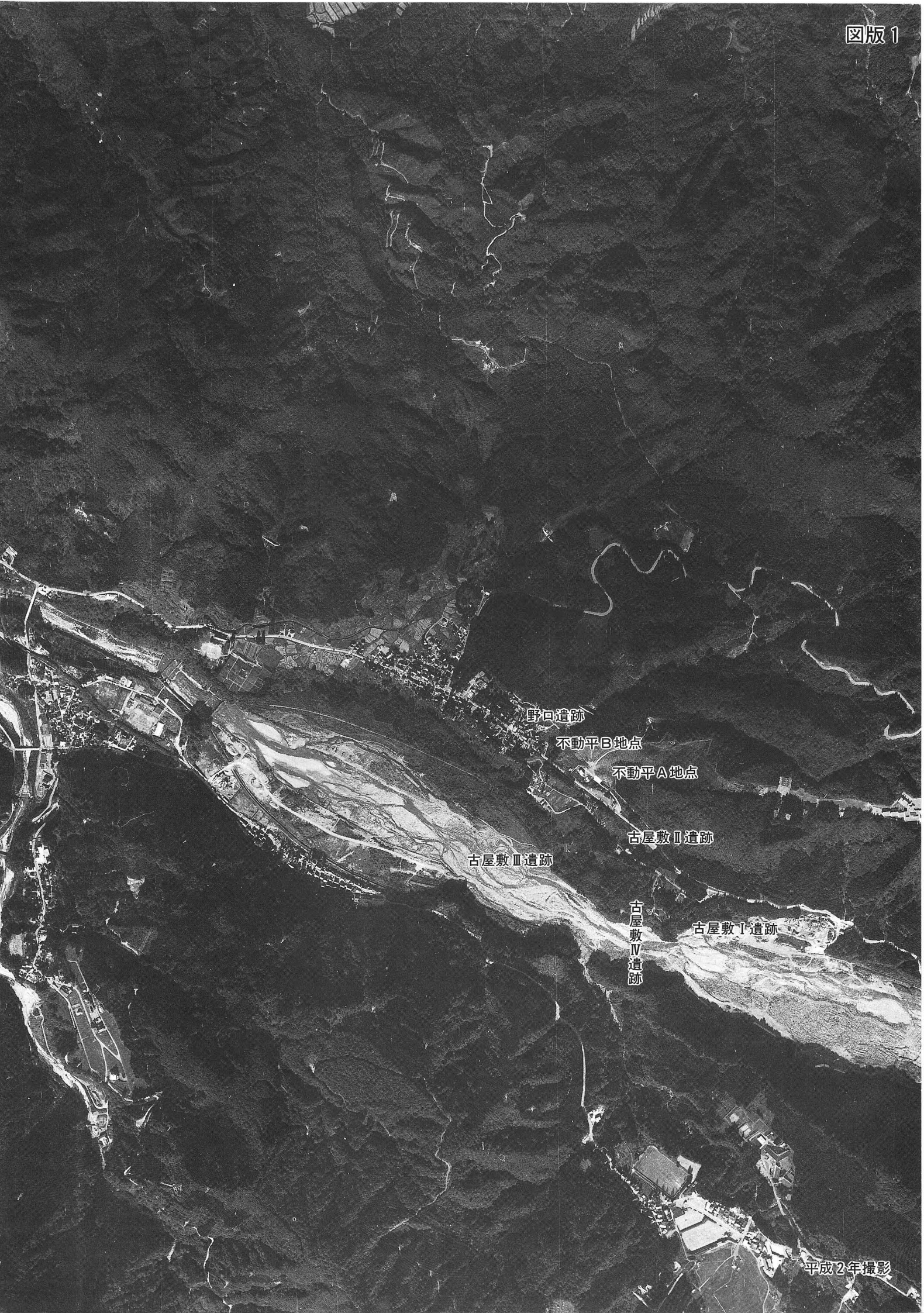
ヤ　**安田良栄**　1977　「郷土のあけぼの」『立山町史』上巻

　柳井睦・神保孝造　1975　『富山県立山町吉峰遺跡第４次発掘調査概要』富山県教育委員会

　山田芳和　1986　「新崎式期」『真脇遺跡』能都町教育委員会、真脇遺跡発掘調査団

　山本正敏　1990　「Ⅱ石器各説」『北陸自動車道遺跡調査報告－朝日町編５－境Ａ遺跡　石器編』富山県教育委員会

図版 1



図版２

1．調査区全景

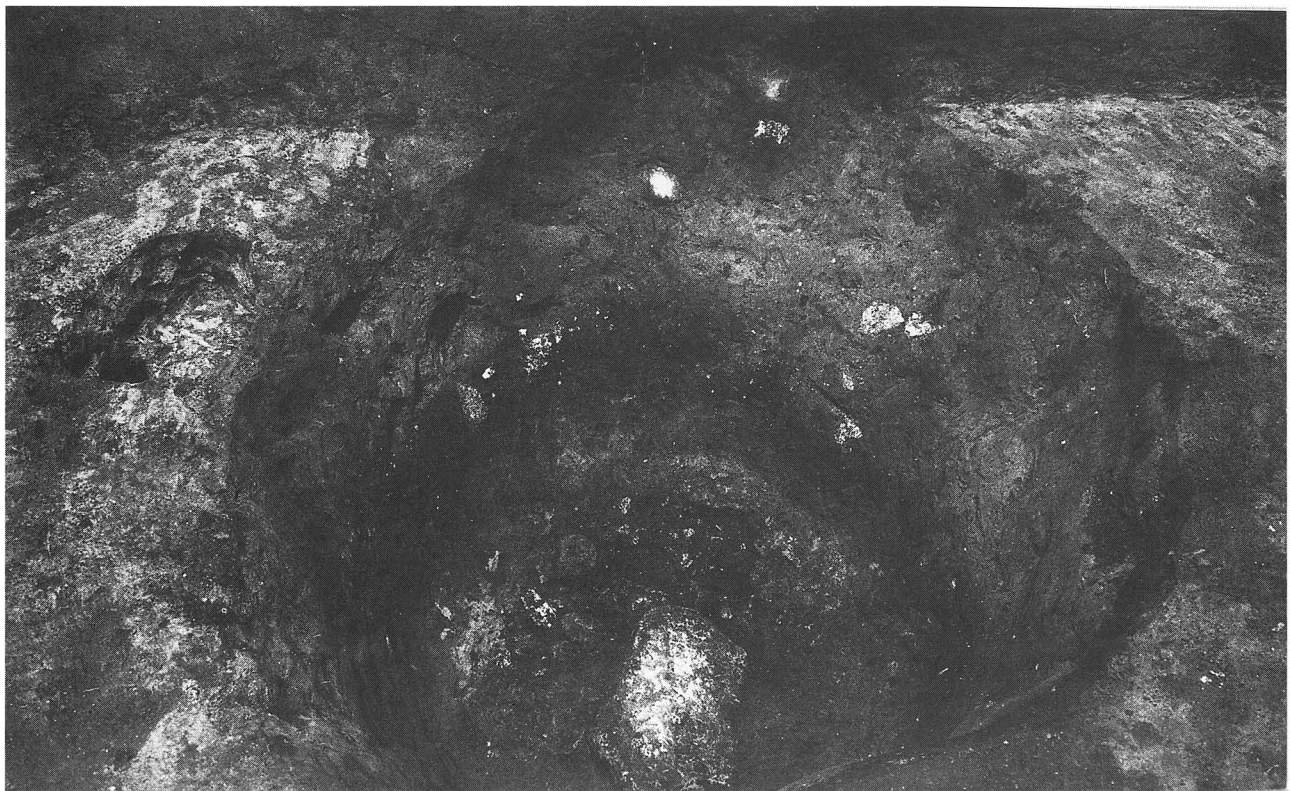
2．調査区全景

図版３

1．穴18断面

2．穴18底部

3．穴18完掘後



図版 4

包含層

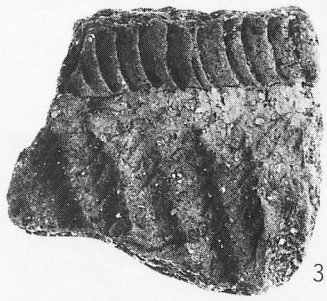
図版 5

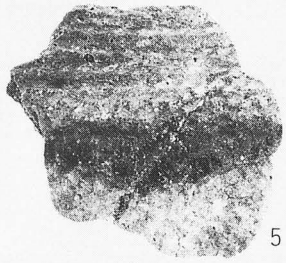
包含層

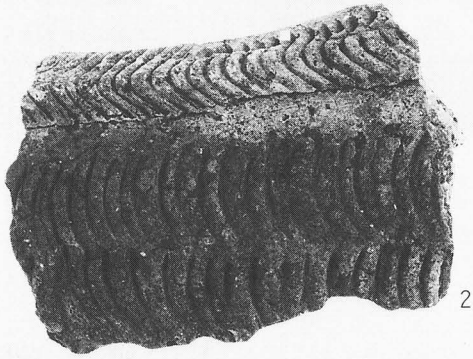
図版 6

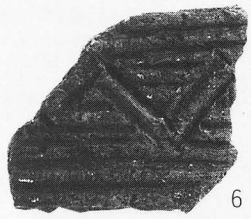
包含層

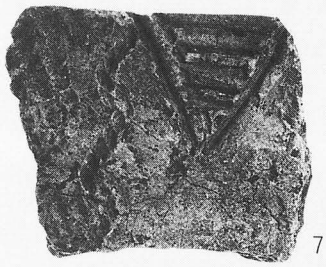
1

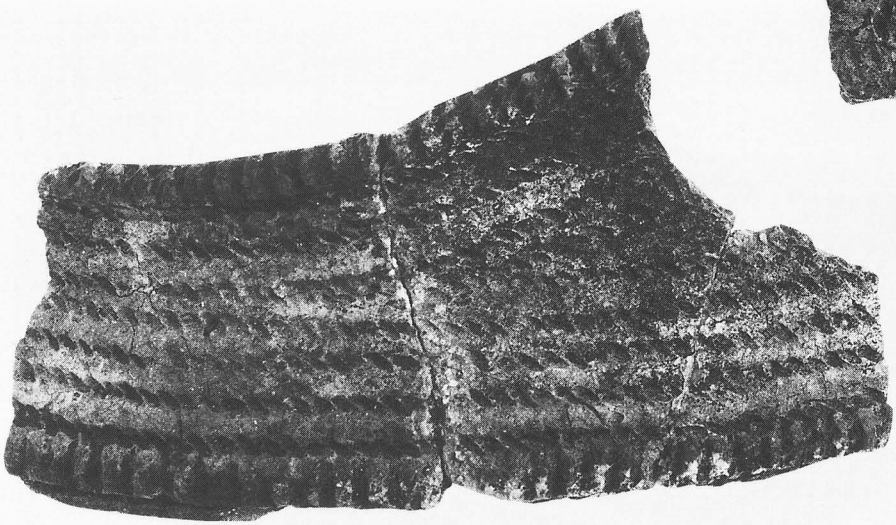

3

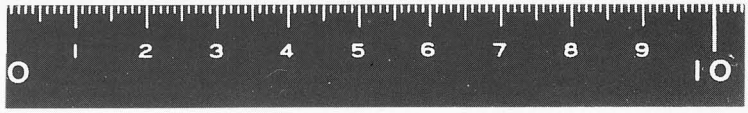

5


2


6


7


4

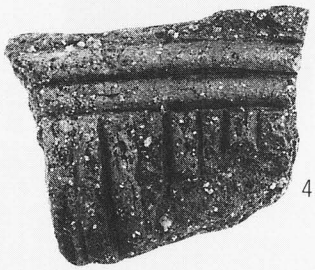


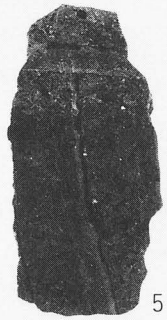
図版 7

包含層

2

3


4

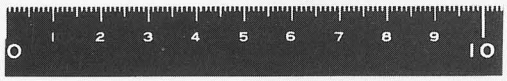

5

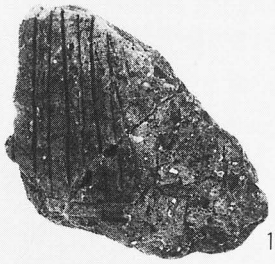
6

7

8

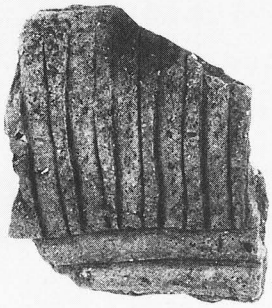
9



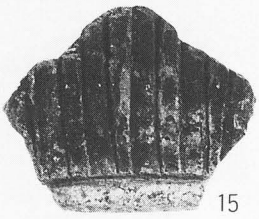

10

11

12

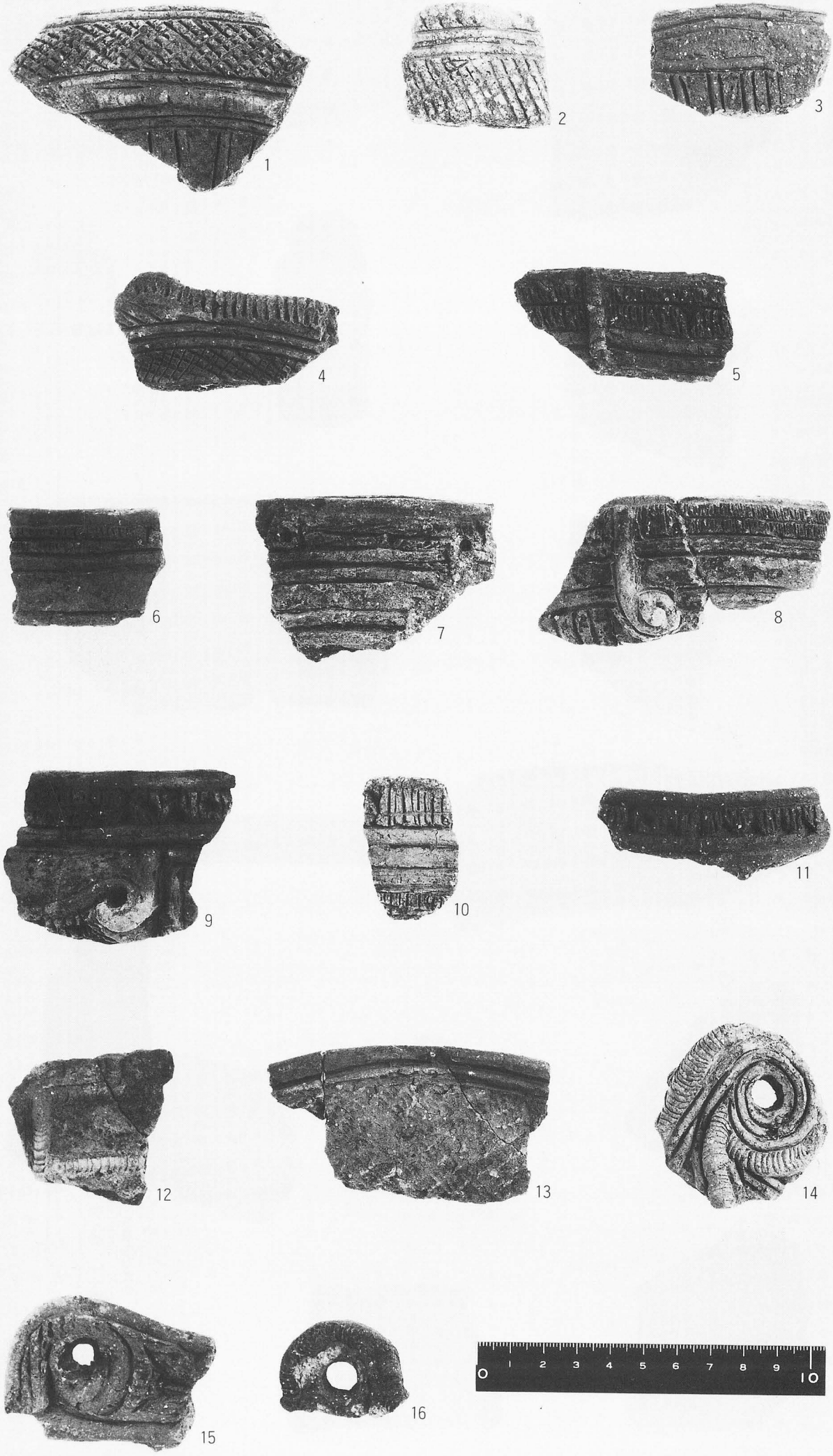

13

14


15

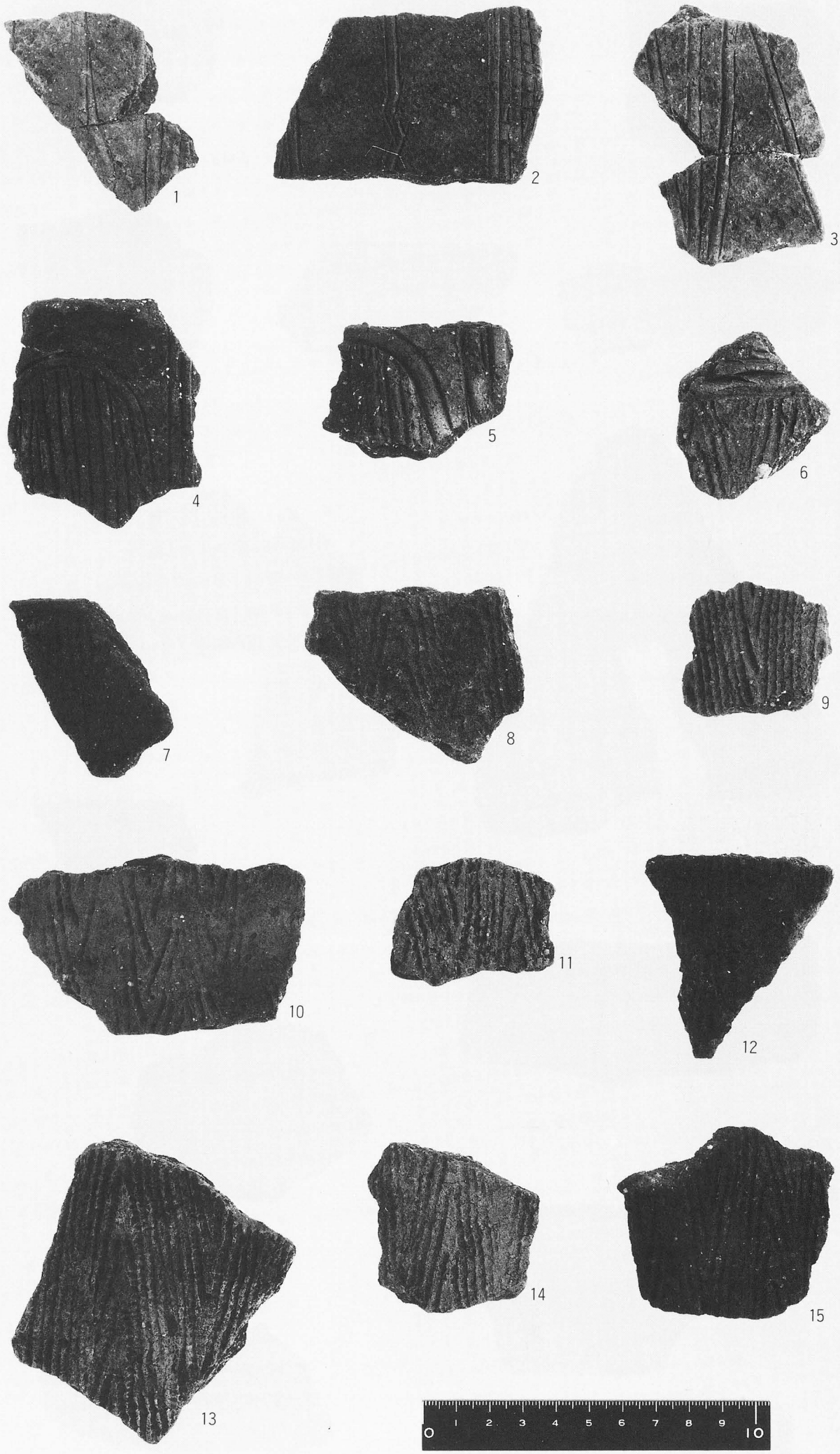
図版 8

包含層



図版 9

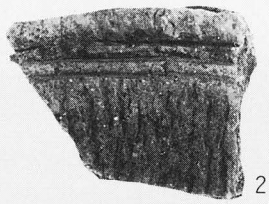
1～9．包含層
10．表採
11～15．包含層



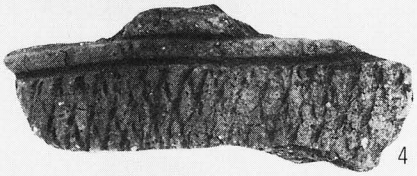
図版10

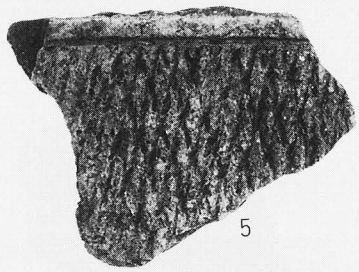
包含層

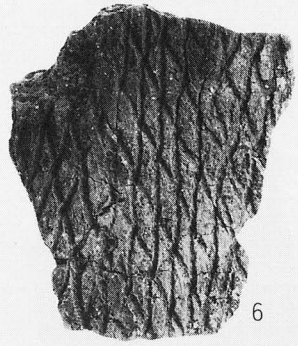
1

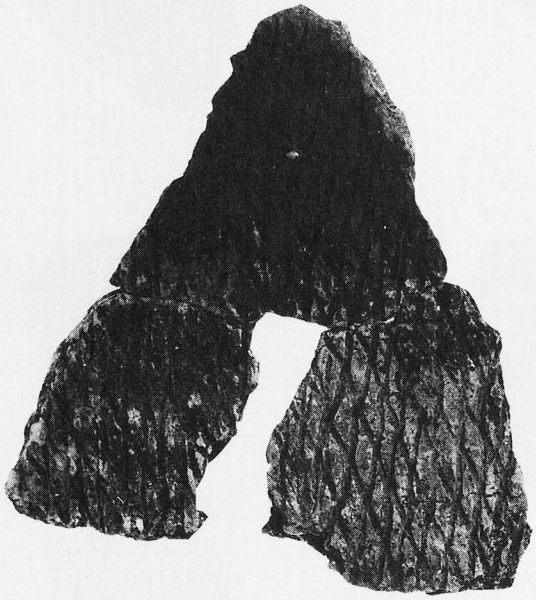

2

3

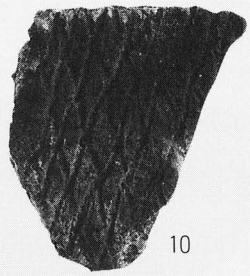

4


5

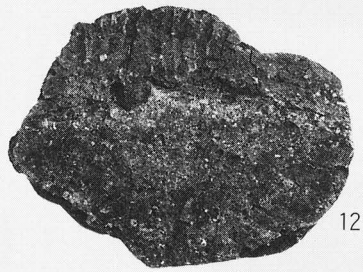

6

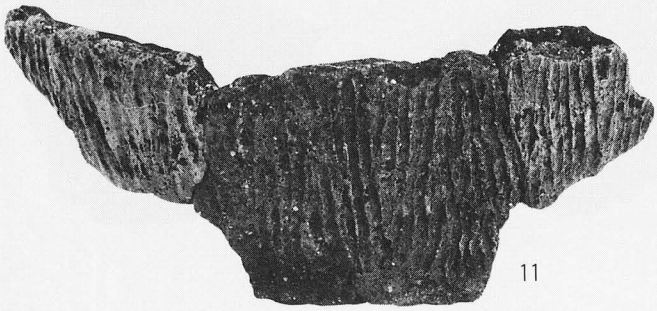

7

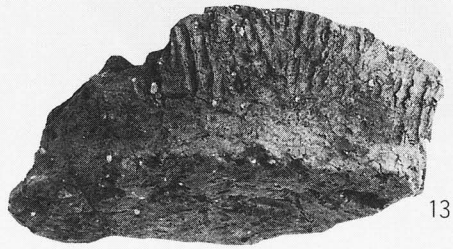
8

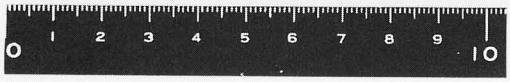

10

9


12

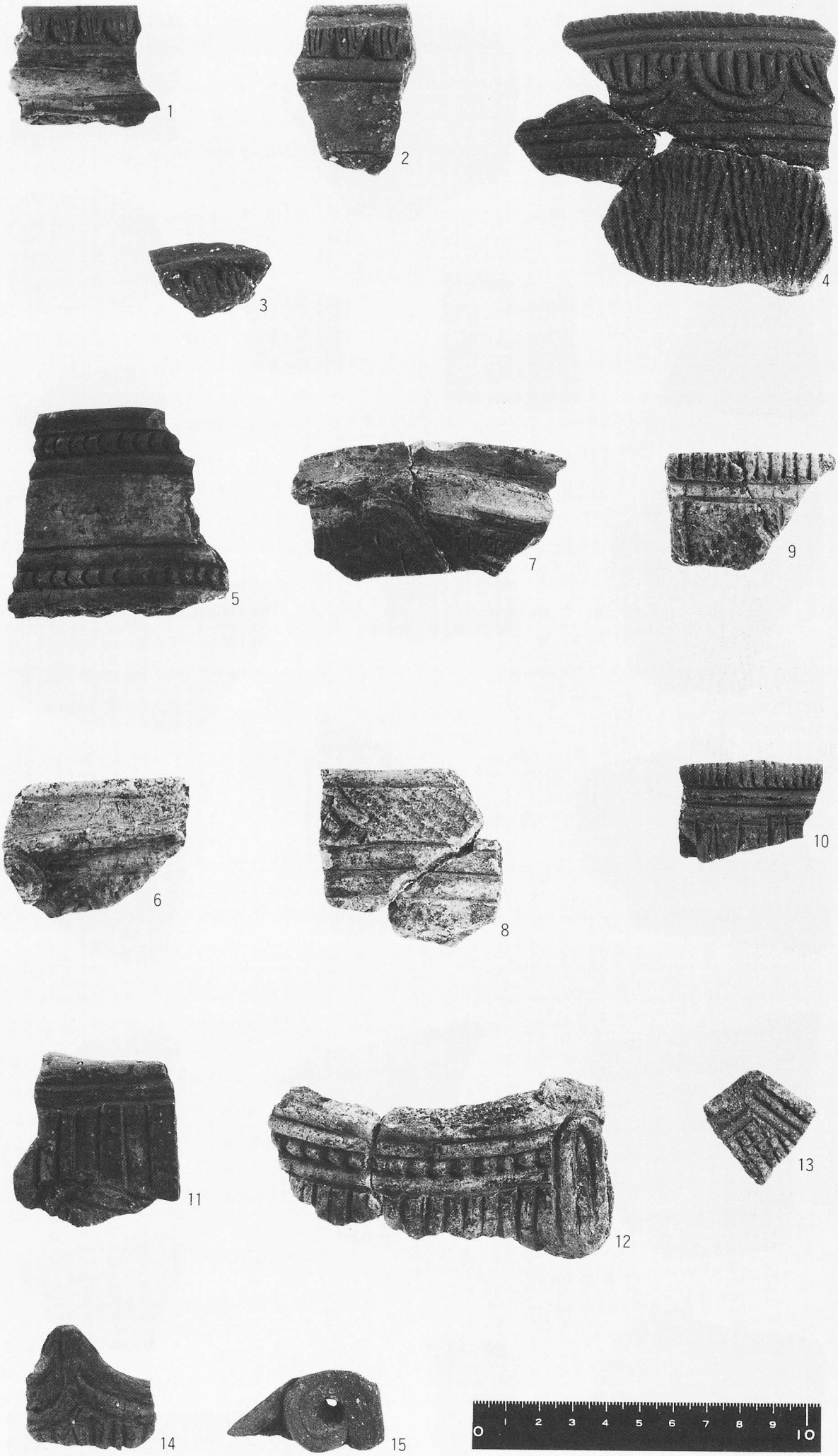

11


13



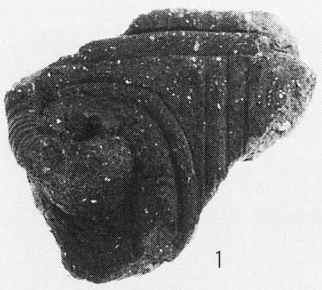
図版11

包含層

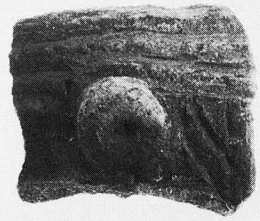


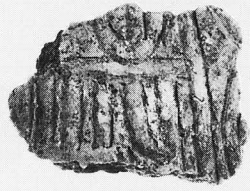
図版12

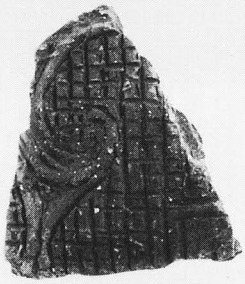
包含層

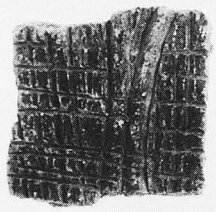

1

2

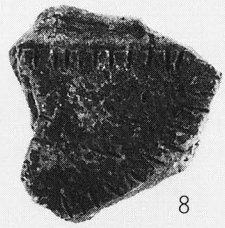

3

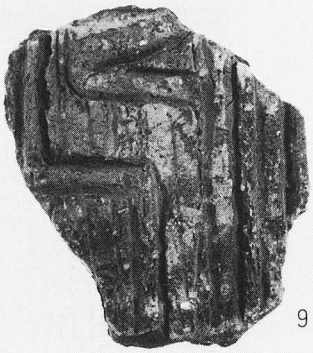

4

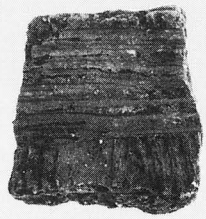

5


6

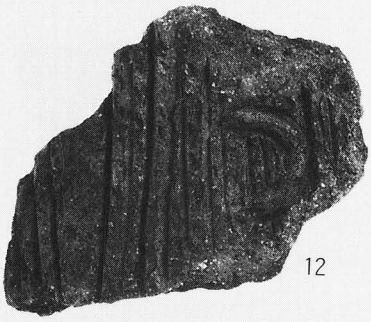
7

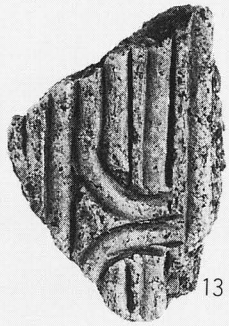

8


9

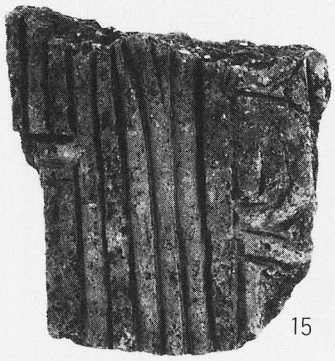

10

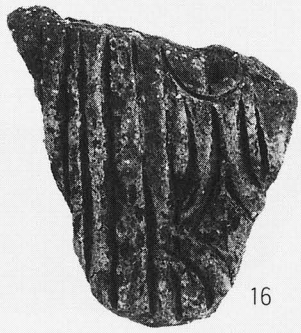
11

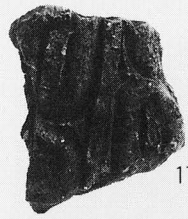

12

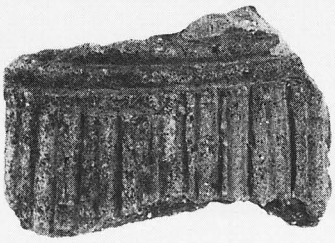

13

14


15

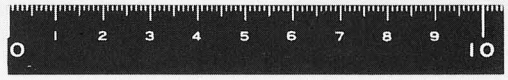

16


17


18

19

20

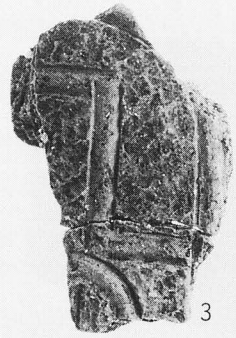


図版13

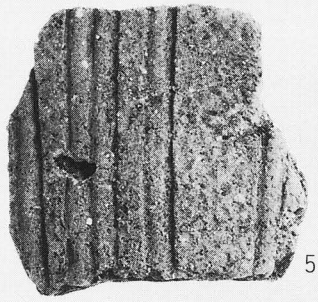
包含層

1

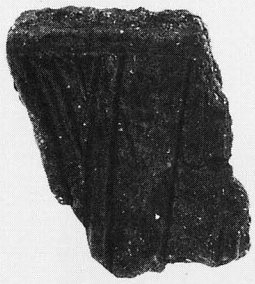
2


3

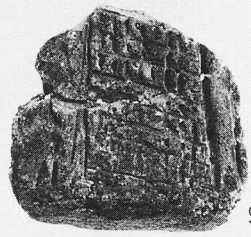
4

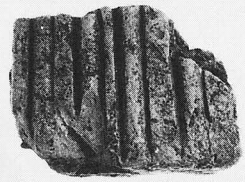

5

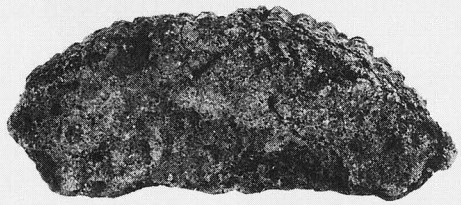
6

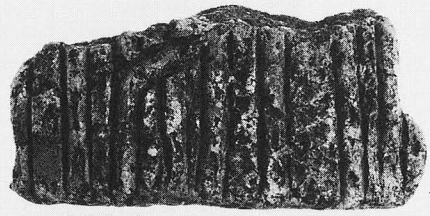

7

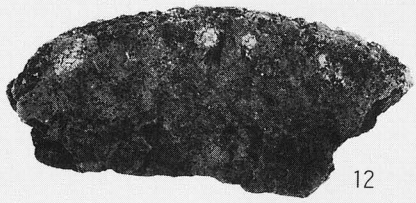
8


9

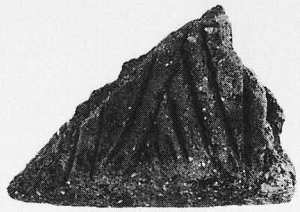

11


10

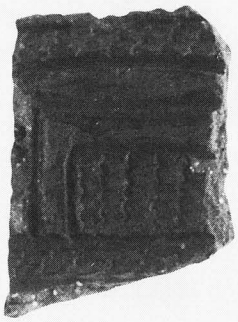

13

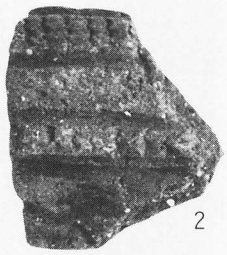

12

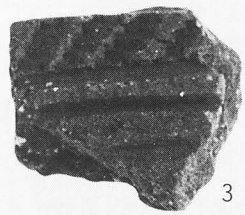
15

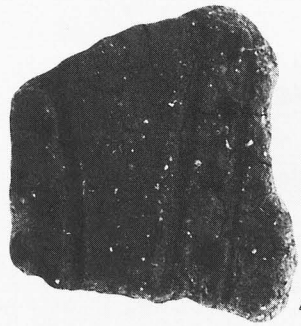

14

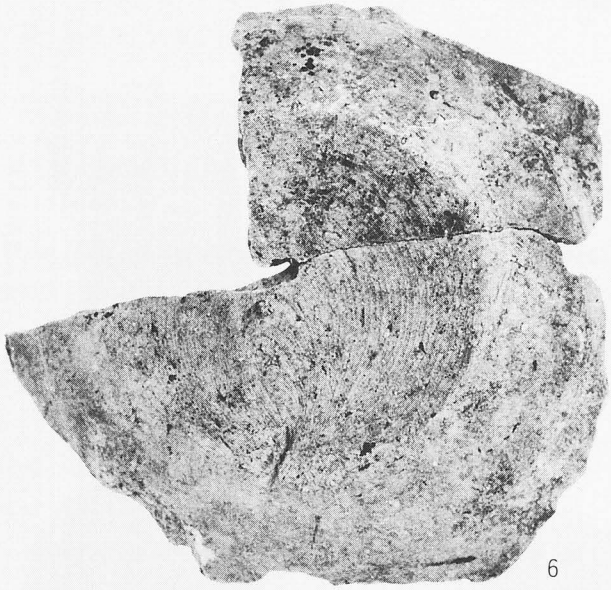
包含層


1

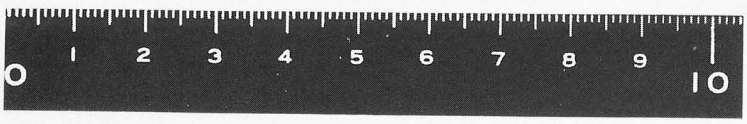

2


3


4

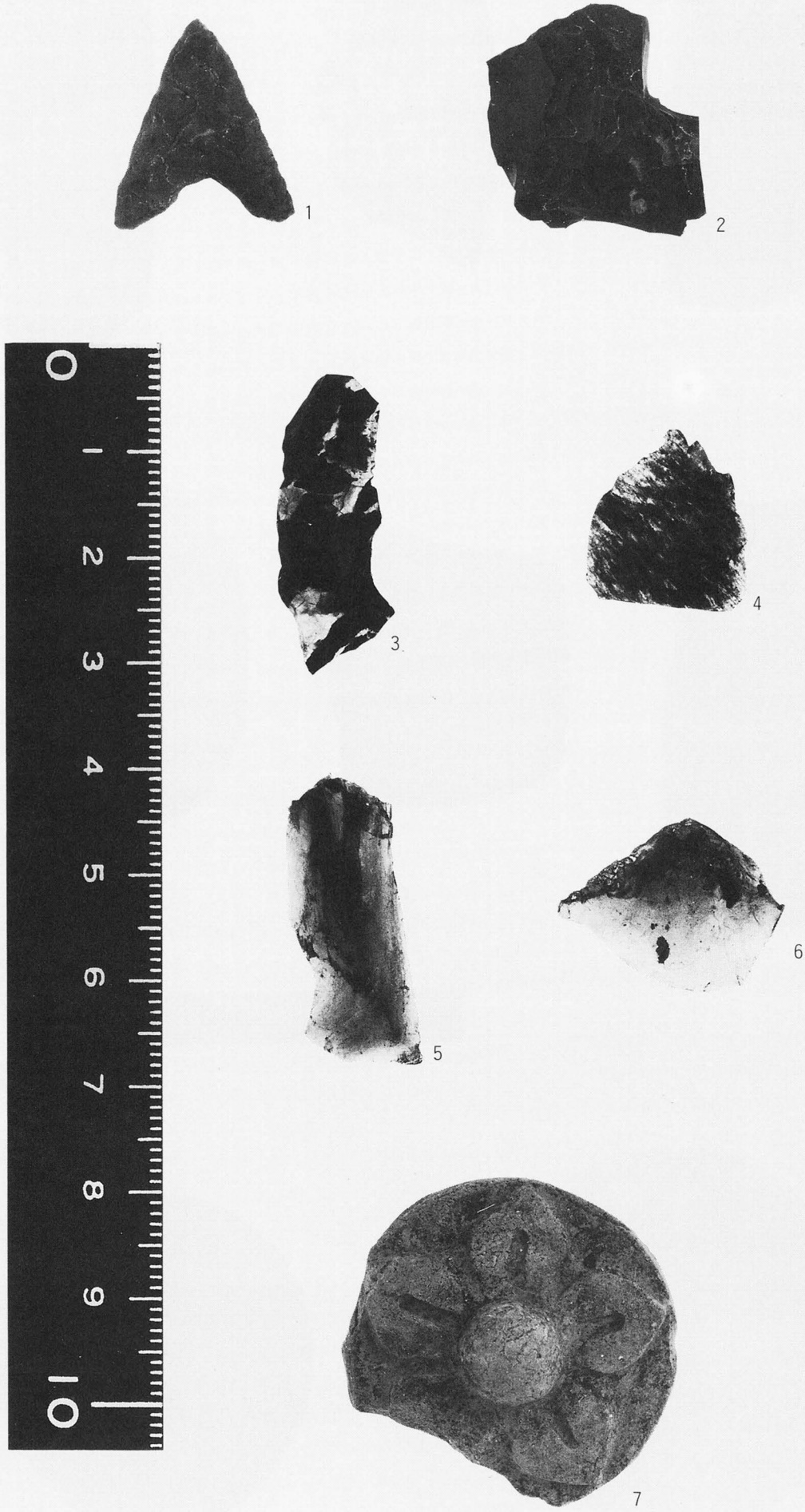

6

5



図版15

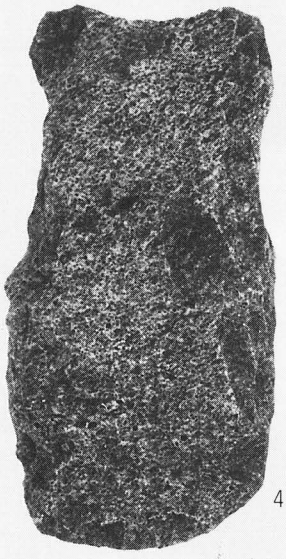
1．表採
2～7．包含層

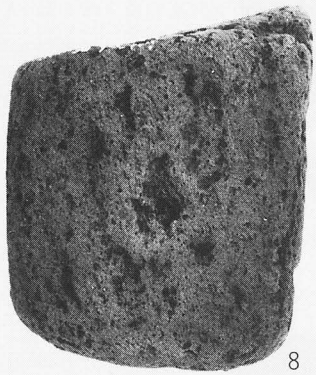


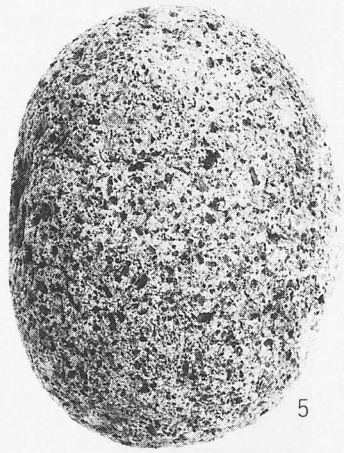
1

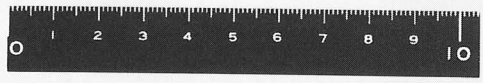
2

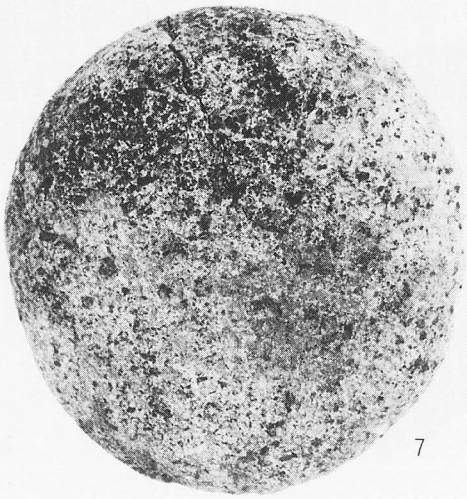
3

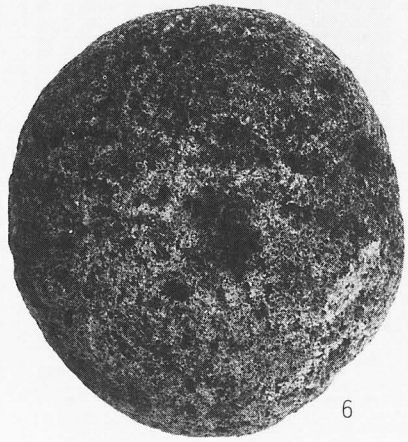

4


8


5




7


6

古屋敷Ⅲ遺跡

―発掘調査報告―

立山町文化財調査報告書第17冊

発行日　平成5年3月19日
編　集　立山町教育委員会
発　行　立山町教育委員会
印　刷　ヨシダ印刷株式会社